与論町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

県営畑地帯総合土地改良事業（真正地区）
に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

上城跡（うわぐすく）

上城遺跡（うわぐすく）

1990年3月

大島郡与論町教育委員会

序　　文

今回の調査は，与論町麦屋真正地区において県営畑地帯総合土地改良事業を推進していたところ，昭和62年度当地区の分布調査の結果同地区内に上城遺跡が所在していることが判明したため，畑総事業の推進と埋蔵文化財との調整を図るため，行われた事業であります。

この調査及び報告書の発刊に至るまで，鹿児島県教育委員会文化課のご指導や国，県のご援助をいただき無事終了することができ，今後与論島古代史の探求と上城遺跡保護，調査のために貴重な資料となるものと確信します。

なお，本調査に当たって，助成を賜りました国，県をはじめ発掘調査から報告書作成までご尽力をくださった文化課の方々や作業協力者，土地所有者の方々に衷心から感謝申し上げ，さらにこの報告書のご活用と今後とも埋蔵文化財の保護につきまして一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成２年３月

与論町教育委員会
教育長　喜山　富三

例　　言

1　本報告書は，大島郡与論町県営畑地帯総合土地改良事業（真正地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は，国，県の補助を得て，与論町教育委員会が調査主体者となって実施した。なお，発掘調査，発掘調査報告書作成については県教育庁文化課に依頼した。

3　本書の執筆・編集は吉永正史，堂込秀人がそれぞれ分担して行った。

第１～４章，５章３節　　吉永

第５章　　堂込

4　本書で用いたレベル数値は，すべて海抜高である。

5　遺物番号は，通し番号を付した。本文及び挿図，図版の番号とは一致する。

6　出土した獣魚骨については鹿児島大学農学部助教授西中川駿氏に鑑定を依頼し，その結果について玉稿を頂いた。

目　　次

序
例　言
第１章　調査の経過 …… 6
　第１節　調査に至るまで …… 6
　第２節　調査の組織 …… 6
　第３節　調査の経過 …… 7
第２章　遺跡の位置及び環境 …… 8
第３章　土層 …… 13
第４章　上城跡の調査 …… 13
　第１節　調査の概要 …… 13
　第２節　各トレンチの調査 …… 13
　第３節　遺物 …… 17
　第４節　まとめ …… 18
第５章　上城遺跡の調査 …… 20
　第１節　調査の概要 …… 20
　第２節　遺構 …… 20
　第３節　遺物 …… 25
　　１）土器 …… 25
　　２）石器 …… 39
　　３）貝製品 …… 44
　　４）骨格製品 …… 46
　第４節　まとめ …… 51
第６章　上城遺跡出土の動物骨について …… 56

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧表 …… 9
第２表　上城遺跡石器計測表 …… 43
第３表　上城遺跡螺貝製貝斧計測表 …… 46
第４表　上城遺跡骨格器計測表－１ …… 49
第５表　上城遺跡骨格器計測表－２ …… 50

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 10
第２図　遺跡周辺の地形及びトレンチ配置図 …… 11
第３図　標準土層模式図 …… 13
第４図　炉跡状遺構実測図 …… 14
第５図　上城跡実測図 …… 15
第６図　第４・５トレンチ土層図 …… 17
第７図　上城跡出土遺物 …… 17
第８図　住居跡位置図 …… 19
第９図　１号住居跡・２号住居跡上面実測図 …… 21
第10図　３号住居跡～７号住居跡・９号住居跡上面実測図 …… 22
第11図　８号住居跡上面実測図 …… 23
第12図　住居跡（１・２・４・５・８号住居跡）出土遺物 …… 24
第13図　10～19号住居跡上面実測図 …… 26
第14図　10～19号住居跡石組遺構及び住居跡検出状況 …… 27
第15図　10～19号住居跡完掘状況実測図 …… 28
第16図　10～19号住居跡土層断面図及び Pit 断面図，切り合い関係 …… 29
第17図　10～19号住居跡遺物出土状況（上層） …… 30
第18図　10～19号住居跡遺物出土状況（下層） …… 31
第19図　10～19号住居跡出土土器(1) …… 32
第20図　〃　(2) …… 33
第21図　〃　(3) …… 34
第22図　〃　(4) …… 35
第23図　〃　(5) …… 36
第24図　〃　(6) …… 37
第25図　〃　(7) …… 38
第26図　10～19号住居跡出土石器(1) …… 40
第27図　〃　(2) …… 41
第28図　〃　(3) …… 42
第29図　〃　(4) …… 43
第30図　10～19号住居跡出土遺物（貝玉） …… 44
第31図　〃　（貝皿） …… 44
第32図　附刃模式図 …… 44
第33図　住居跡出土遺物（螺貝製貝斧） …… 45
第34図　10～19号住居跡出土骨格器（装飾品－１） …… 47

第35図　〃　（装飾品－２）……48
第36図　〃　（耳栓）……48
第37図　〃　（利器－１）……49
第38図　〃　（利器－２）……50

図　版　目　次

図版１　①遺跡遠景，②遺跡全景……63
図版２　③遺跡全景，④伐採作業，⑤～⑦発掘作業，⑧遺跡見学会
⑨第５トレンチ－土層……64
図版３　⑩上城跡全景，⑪～⑭本丸石垣・上り口，⑮⑯炉跡状遺構検出状況，……65
図版４　遺物出土状況　⑰土器－８，⑱土器－51，⑲土器－36，⑳土器－21
㉑骨格器－195，㉒骨格器－203，㉓石器－132，㉔石器－133，㉕猪下顎骨……66
図版５　㉖１号住居跡上面，㉗２号住居跡上面，㉘３号住居跡上面
㉙４号住居跡上面，㉚５号住居跡上面，㉛７号住居跡上面
㉜８号住居跡上面，㉝９号住居跡上面……67
図版６　10～19号住居跡，㉞上面，㉟完掘状況，㊱㊲石組遺構……68
図版７　出土遺物　㊳１～４，㊴５～７・９，㊵８，㊶10～12，㊷13～22
㊸21，㊹23～29，㊺30～35・37～40……69
図版８　出土遺物　㊻36，㊼51，㊽41～53，㊾54～65，㊿66～81，(51)82～90
(52)91～102，(53)103～113……70
図版９　出土遺物　(54)114～123，(55)124～129，(56)130～136，(57)137～143
(58)140，(59)144～151・152，(60)150・153，(61)157～164……71
図版10　出土遺物　(62)165～172，(63)173～176，(64)177～183，(65)156
(66)184～189，(67)154・155・190～194，(68)195～204，(69)205～207……72

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまで

鹿児島県農政部（農地整備課・沖永良部土地改良出張所）は，大島郡与論町東区真正地区において県営畑地帯総合土地改良事業を計画し，実施計画地域内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会（文化課）に照会した。

文化課は昭和62年４月に分布調査を実施したところ，平成元年度工事実施予定区域内に上城跡の存在することが確認された。

この結果をもとに，農地整備課（沖永良部土地改良出張所），県文化課，与論町教育委員会とが協議を行い，事業の推進と埋蔵文化財の保護との調整を図るとともに，遺跡の性格及び範囲を確認することとなった。調査は国，県の補助を得て与論町教育委員会が調査主体者となって実施することとした。なお，調査及び整理・報告書作成作業は県文化課に依頼した。

発掘調査は，平成元年５月15日から６月10日まで実施し，その後県教育庁文化課収蔵庫において整理・報告書作成作業を行った。

第２節　調査の組織

調査主体者	大島郡与論町教育委員会		
調査責任者	与論町教育委員会	教　育　長	福永政宜実（～９月）
			喜山　富三（10月～）
調査事務担当	与論町教育委員会	社会教育課長	川上　政雄
		参事兼課長補佐	恵藤　和数
		派遣社会教育主事	塩入　俊實
		主　事　補	竹沢真奈美
		社会教育指導員	松村　靖志
		中央公民館長	光　　才池
		係　　長	土持　俊秀
		主　　事	池田　直也
発掘調査担当	鹿児島県教育庁文化課	文化財研究員	吉永　正史
		〃	堂込　秀人

なお，調査の企画等に関し，県教育庁文化課長吉井浩一，同課長補佐奥園義則、同主幹立園多賀生，同主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長吉元正幸，同企画助成係長京田秀允氏等の指導・助言を得た。

遺物については鹿児島県考古学会会長河口貞徳氏に指導助言を得た。また，石材については鹿児島県立玉龍高校教諭成尾英仁氏，遺物については沖縄県教育委員会専門員岸本義彦氏に多くの教示を得た。

第3節　調査の経過

発掘調査は平成元年5月15日から6月10日まで実施した。以下日誌抄により略述する。

5月15日(月)　発掘器材等の点検，搬入。発掘地点の選定及び発掘作業員への諸注意伝達。

5月16日(火)　上城跡地区の伐採作業。第1～6トレンチの設定及び掘り下げ。第2、3トレンチは聞き取りによると，天地返しを行ったとのこと。

5月17日(水)　第1，4～6トレンチの掘り下げ。第1トレンチでPitを確認し，掘り下げを行う。また，伐採後に第1トレンチの西側に入口と考えられる加工部分が観察される。第6トレンチにおいて遺構らしきものを確認する。

5月18日(木)　第1トレンチ周辺の清掃。第4，5トレンチ掘り下げ。第6トレンチを拡張し掘り下げを行う。

5月19日(金)　上城跡地区の伐採作業。階段状遺構部分の表土剝ぎ。第6トレンチの拡張，掘り下げ。住居跡を確認する。土器片及び獣魚骨片が多くみられる。第8トレンチの設定。

5月20日(土)　第6トレンチ拡張部の掘り下げ。数基の住居跡であることを確認。第8トレンチ掘り下げ。第9トレンチの設定，掘り下げ。

5月22日(月)　第6トレンチ遺構確認作業。第9トレンチ掘り下げ。遺構（住居跡）を確認。第4，5トレンチ土層実測。

5月23日(火)　第6トレンチ遺構確認状況写真撮影。断面観察用ベルトを設定し，遺構検出作業の開始。排土はすべて水洗することとする。第10～13トレンチの設定，掘り下げ。第10，13トレンチにて住居跡確認。

5月24日(水)　第6トレンチ遺構検出作業。遺構出土状況平板実測。第13トレンチ拡張，住居跡確認。第14，15トレンチの設定，掘り下げ。第14トレンチにて住居跡確認。

5月26日(金)　第6トレンチ遺構検出。遺物出土状況平板実測。第13トレンチ遺構実測。

5月30日(火)　第6トレンチ遺物出土状況写真撮影。1／20実測作業。第14トレンチの拡張，掘り下げ。第17，18トレンチの設定，掘り下げ。第17トレンチにて住居跡確認。第10，14，15トレンチの遺構実測。

5月31日(水)　第6トレンチ住居跡実測。第19～21トレンチの設定，掘り下げ。第19，21トレンチにて住居跡確認。

6月1日(木)　第6トレンチ住居跡掘り下げ。遺物出土状況平板実測。魚骨片多く出土。第22，23トレンチの設定，掘り下げ。

6月2日(金)　第6トレンチ住居跡掘り下げ。遺物出土状況平板実測。第10，20トレンチ遺構実測。第23トレンチにて住居跡確認。

6月3日(土)　第6トレンチ住居跡掘り下げ。第24～27トレンチの設定，掘り下げ。

6月5日(月)　上城跡地区にて地形図作成のためのレベル測定。第6トレンチ床面検出作業。第28トレンチの設定，掘り下げ。第4，5トレンチ埋め戻し。

6月6日(火)　第6トレンチ床面検出作業。第9トレンチ埋め戻し。

6月7日(水)　第6トレンチ観察用畦除去。第22～28トレンチ埋め戻し。

6月8日(木)　第6トレンチ清掃，写真撮影。遺構実測。

6月9日(金)　第6トレンチの床面に砂をのせ埋め戻す。

6月10日(土)　全てのトレンチを埋め戻し，発掘調査を完了する。

整理・報告書作成作業は県教育庁文化課埋蔵文化財収蔵庫において，平成元年6月12日から平成2年3月　日まで実施した。

第2章　遺跡の位置及び環境

1　地理的環境

上城遺跡は大島郡与論町東区大字麦屋アマミズに所在し，与論町役場の南東約4.3km，赤崎の燈台の西北西約700mにあり，迫状となっている部分に形成されている赤崎鍾乳洞の西側に位置する。

遺跡の周辺は迫状となっている小谷(石灰岩が露呈している。)が西側に東西に走っており，遺跡の所在する部分も細長く舌状に延びる台地の端部近くに位置しており，遺跡の一部でも石灰岩が露呈しているところがある。この石灰岩が一部露呈している部分が上城跡と呼称されているところである。付近の畑地の多くが石灰岩礫除去等を目的とした天地返しが行われている。

遺跡の所在する与論町は，鹿児島県の最南端，鹿児島市から563kmの南海上にある，太平洋と東シナ海に囲まれた与論島全島を町域としている。南方約28kmの海上には沖縄本島，北方約31kmの海上には沖永良部島がある。

本島は珊瑚礁が隆起した平坦な島で，ムガと呼ばれている島の最高地点で97.2mを測る。内陸部においてはカルスト地形が発達し，島の北部や西部にはドリーム群がみられる。また，島には北部から南部へ走る中央断層線と最高地点の北側から東部へ走る東部断層線の2つの断層線がある。この断層線によって校区が設定されている。ほぼ中央断層線を境にして西部が茶花校区に，東部のうち東部断層線の北よりから北部が那間校区，南部が与論校区となっている。

2　歴史的環境

与論町内の遺跡は鹿児島県市町村別遺跡地名表によると縄文時代1カ所，弥生時代以降5カ所，城（グスク）1カ所が知られている。

昭和29～30年に行われた九学会連合の調査により遺跡・遺物等が確認されている。その報告によると，朝戸遺跡から磨製石斧，打製石斧，類須恵器片等が発見されている。その後，熊本大学の白木原和美氏等による調査等により8カ所の遺跡が確認されている。また，与論町における最初の考古学的発掘調査も実施した。朝戸地区ではフェンサ下層式土器，類須恵器，フェンサ下層式土器，南宋白磁等が出土し，ヤドンジョウ遺跡からは沈線文土器，喜念Ⅰ式土器，宇宿上層式土器，擦痕文土器等が出土している。報告によれば，与論島での歴史の開始は今か

ら約3,000年前とされている。13世紀以後は与論島は沖縄系の勢力のもとにあり，16世紀に築かれた「与論城」は琉球系の城郭であり，その形態をよく残しているものである。

第1表　周辺の遺跡一覧

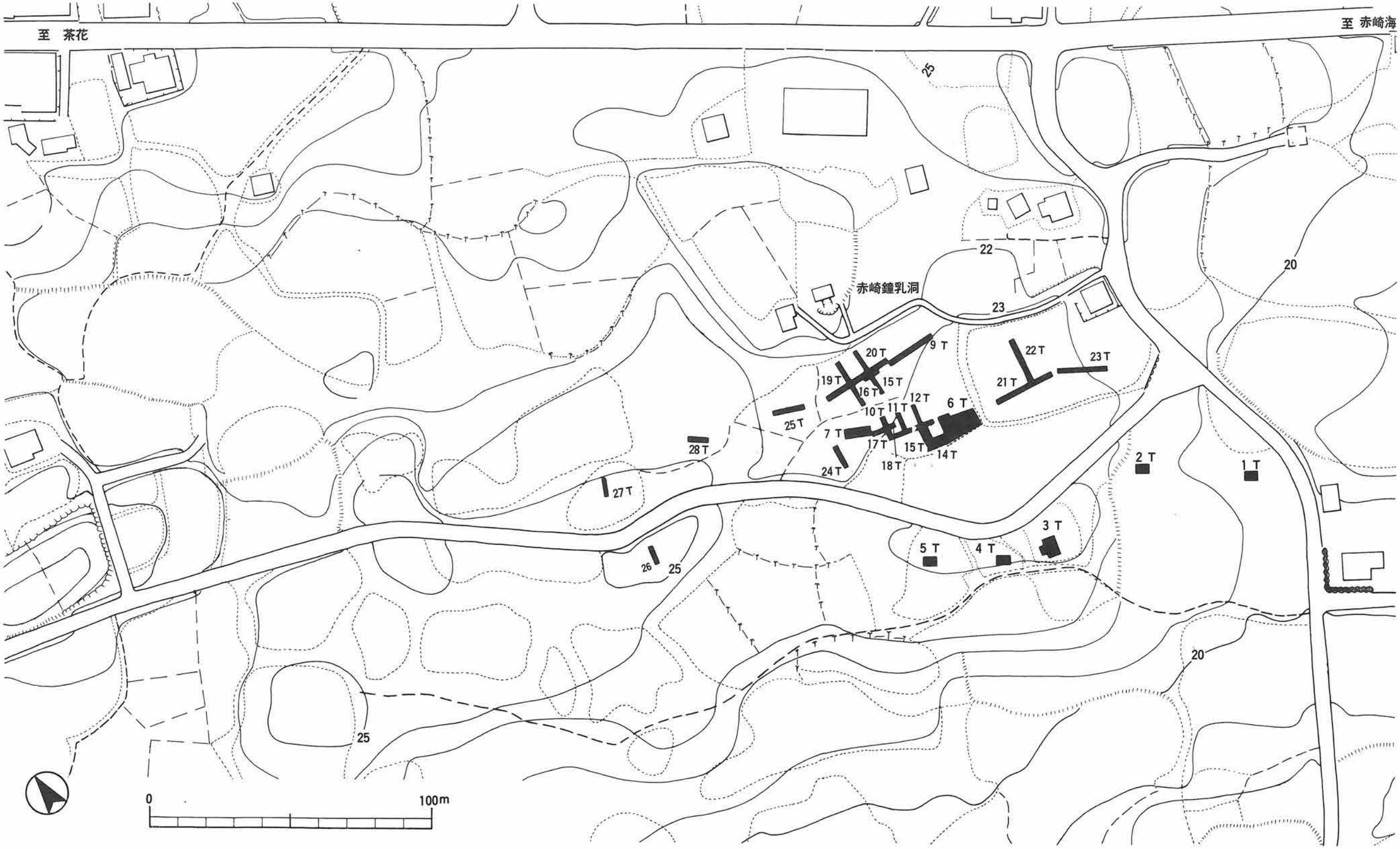
番号	遺　跡　名	所　在　地	地形	時　代	遺　物　等	備　　考
1	茶花	与論町茶花	台地			
2	古里	〃　古里	〃			「南島先史時代」1956
3	立長ハギビナ	〃　立長ハギビナ	〃	縄文	槍石	「奄美－自然と文化」1959
4	城	〃　立長城	丘陵	中世	青磁	「与論城遺跡について」1974 『鹿児島考古』
5	太田氏宅散布地	〃　朝戸	台地	縄～		「奄美－自然と文化」1959
6	朝戸	〃　朝戸	〃	縄文～中世	フェンサ式，類須恵器染付	「与論島の先史時代」1981
7	麦屋	〃　麦屋693	〃	縄～弥	喜念式，宇宿上層式	
8	ヤドンジョウ	〃　麦屋ヤドンジョウ	〃	〃	喜念式，宇宿上層式	「与論島の先史時代」1981
9	片岡氏宅散布地	〃　麦屋	〃	縄～		
10	与論城	〃　立長1,073－1	丘陵	中世		
11	上城	〃　麦屋アマミズ	〃	縄・中		今回報告

参考文献

・「鹿児島県市町村別遺跡地名表」鹿児島県埋蔵文化財報告書㊱ 鹿児島県教育委員会 1985.3

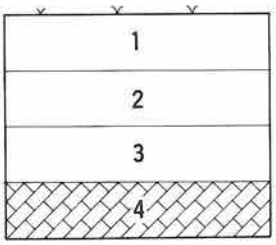
・「与論島の先史時代」　研究室活動報告9　熊本大学文学部考古学研究室　1981

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　遺跡周辺地形及びトレンチ配置図

第3章　土　　層



第3図　標準土層模式図

第1層　暗茶褐色粘質腐植土層で現耕作土である。

第2層　茶褐色粘質混土層である。天地返しの行われた地区で観察される。

第3層　明茶褐色粘質土である。石灰岩風化土である。

第4層　白色石灰岩盤である。この層は隆起珊瑚礁の石灰岩盤であり，基盤層として扱った。

第4章　上城跡の調査

第1節　調査の概要

上城跡は赤崎鍾乳洞の西側にあって，ほぼ東西に延びる微高地上にある。標高は最も高いところで25mを測る。この地域は，今次大戦以前は神域として立ち入りや物の移動等が禁止されていた地域であったが，戦後の農地改良等により上城跡のすぐ北側には道路が開設され，付近の畑地の多くは石灰岩礫除去等を目的とした天地返しが行われている。

上城跡の調査は，神域として立ち入り等が禁止されていたためブッシュ化しており，その伐採作業から始めた。雑木等の除去後，曲輪と考えられる5カ所にトレンチ（2m×3m）を設定して調査を行った。

その結果，第3～5トレンチを設定した畑地の境界部分において石灰岩盤に人工的な造作がみられた。またこの部分では砂岩礫が石灰岩礫に混在していることが確認された。

第1，2，4，5トレンチにおいては畑地の天地返しが行われており遺構，遺物の出土はなかった。第3トレンチにおいては，表土下にはすぐ石灰岩盤が表れるが，石灰岩盤の凹部を利用したと考えられる炉跡状の遺構が確認されたため拡張して調査を行った。

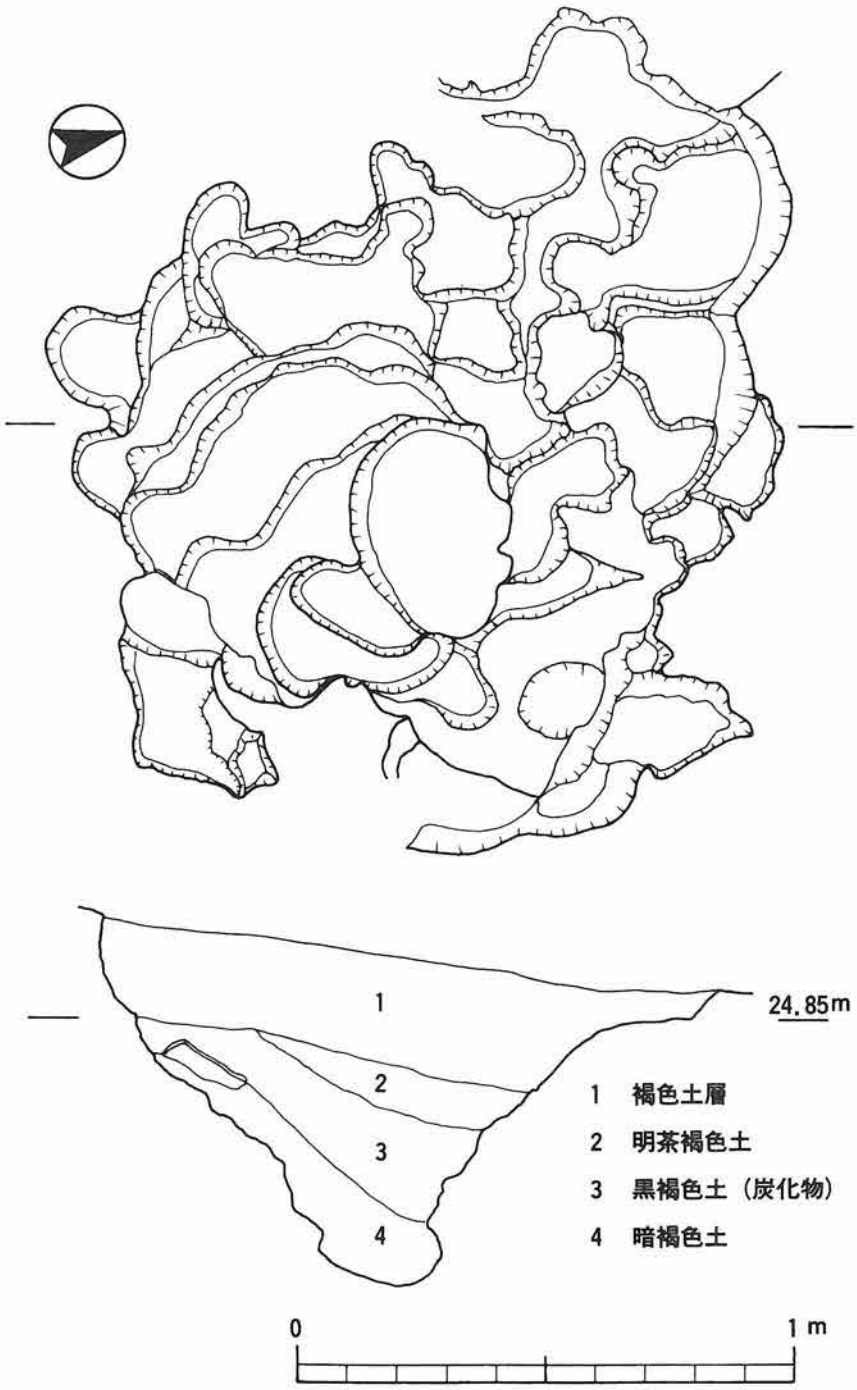
第2節　各トレンチの調査

1　第1，2トレンチ

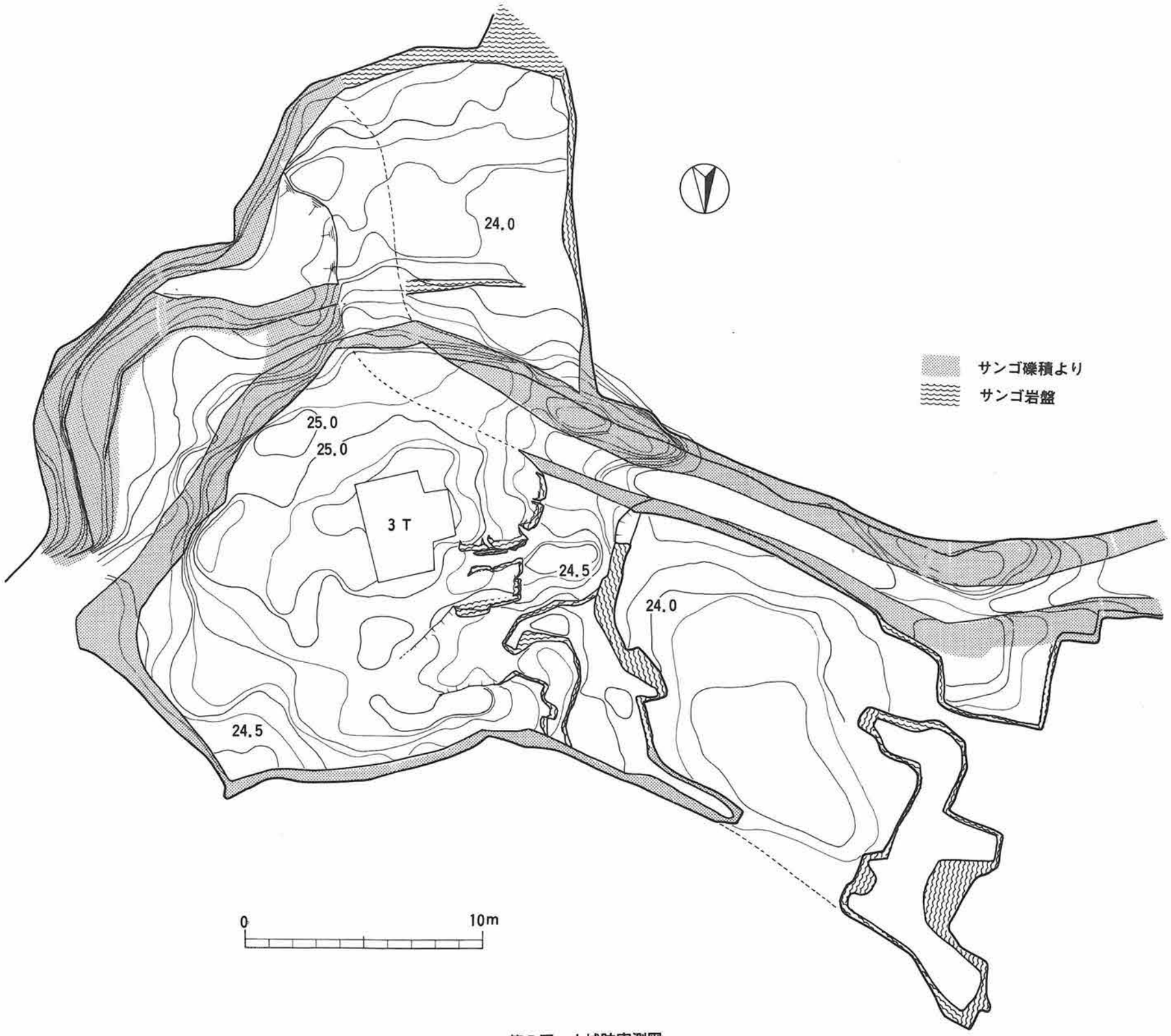
上城跡の東側の畑地に設定し調査を行ったが，これらのトレンチは調査中に石灰岩礫除去等を目的とした天地返しが行われていることが聞き取り調査の結果判明したので調査を中止した。遺物等の出土はなかった。表土は暗褐色粘質土であり，第2層が茶褐色粘質混土である。

2　第3トレンチ

第3トレンチは，上城跡の最高所に設定したものである。表土等はほとんどなく，石灰岩盤が露呈したり，石灰岩礫が多く散乱している。このトレンチからは石灰岩盤の凹地を利用したと考えられる炉跡状遺構が確認された。遺物等は石斧片1と土器の小破片が数点出土した。土器片については小破片のため図化できなかった。炉跡状遺構は，表面の一部がうすい赤褐色と



第4図　炉跡状遺跡実例図



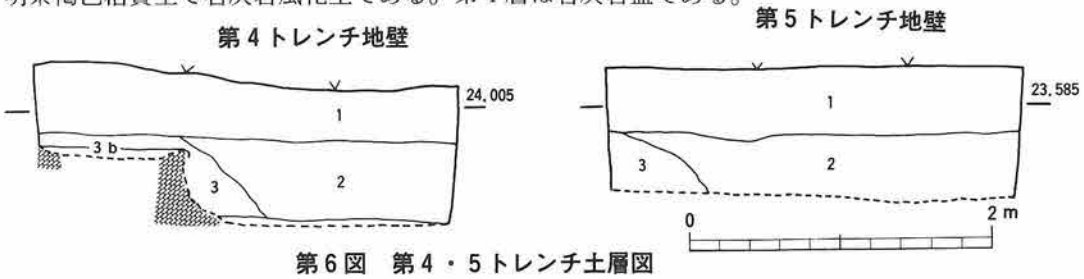
第5図　上城跡実測図

なっており，径約１ｍの円形を呈するものであり，埋土の下部には炭化物や獣魚骨の小破片を混じている。石灰岩盤を利用しているため床部は凹凸がはげしい。埋土は傾斜しており流れ込みの可能性も考えられる。

３　第４，５トレンチ

これらのトレンチは第３トレンチの西側の畑地に第４トレンチを，第４トレンチの西側の畑地に第５トレンチを設定した。第４，５トレンチの畑地に境界部分では露呈している石灰岩盤に曲輪としての区画を行ったと考えられるほぼ直線的な加工部分が見られる。

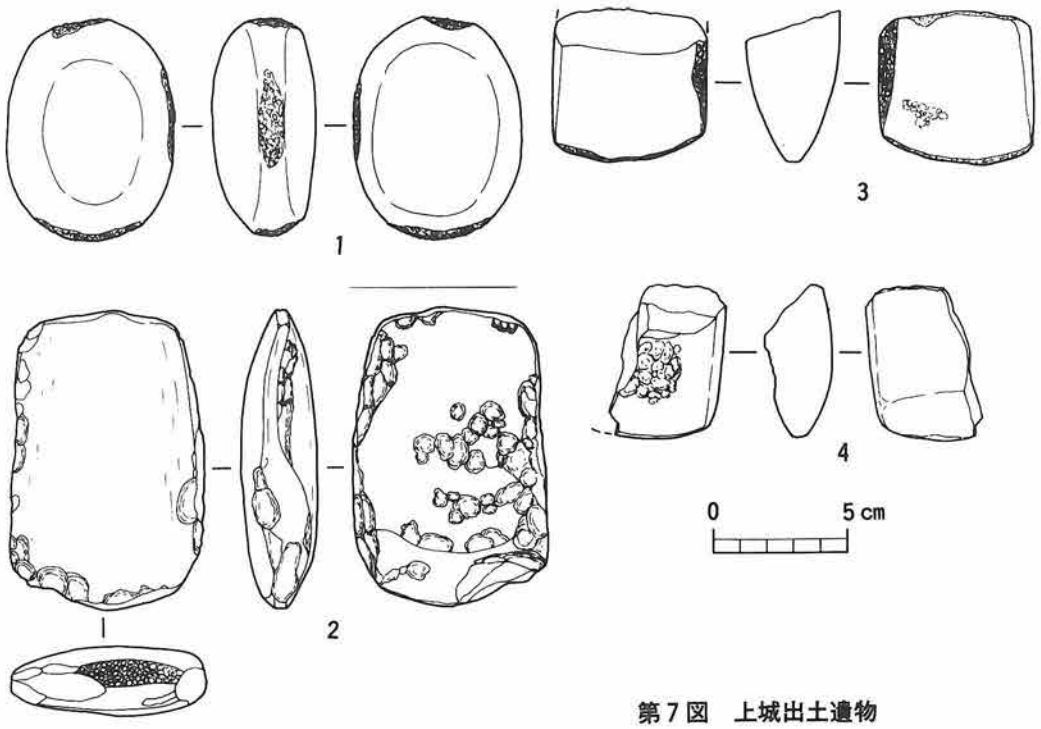
表土は暗褐色粘質腐植土層，第２層が茶褐色粘質土，第３層が灰茶褐色粘質土，第３ｂ層が明茶褐色粘質土で石灰岩風化土である。第４層は石灰岩盤である。



第６図　第４・５トレンチ土層図

第３節　遺物

上城跡から出土した遺物は，第３トレンチにおいてのみであり他のトレンチからの出土はな



第７図　上城出土遺物

かった。1は第3トレンチの炉跡状遺構の埋土中から出土した砂岩製の叩き石である。敲打痕は側面部に3カ所見られ，長さ8.4㎝，幅6.3㎝，厚さ3.9㎝，重さ320ｇを測る。

2～4は上城跡において採集された石斧である。2は平面形が長方形を呈する砂岩製の磨製石斧である。刃部等には敲打痕があり，刃部の破損後叩き石として利用されたものと考えられる。長さ11.3㎝，幅7.3㎝，厚さ2.8㎝，重さ420ｇを測る。3は砂岩製の磨製石斧片で，側縁部に敲打痕をもつ。破損後叩き石に転用したものである。長さ5.8㎝，幅5.8㎝，重さ160ｇを測る。4は砂岩製の磨製石斧片であり，破損後に凹石に転用したものである。長さ5.2㎝，幅4.0㎝，重さ75ｇを測る。

第4節　まとめ

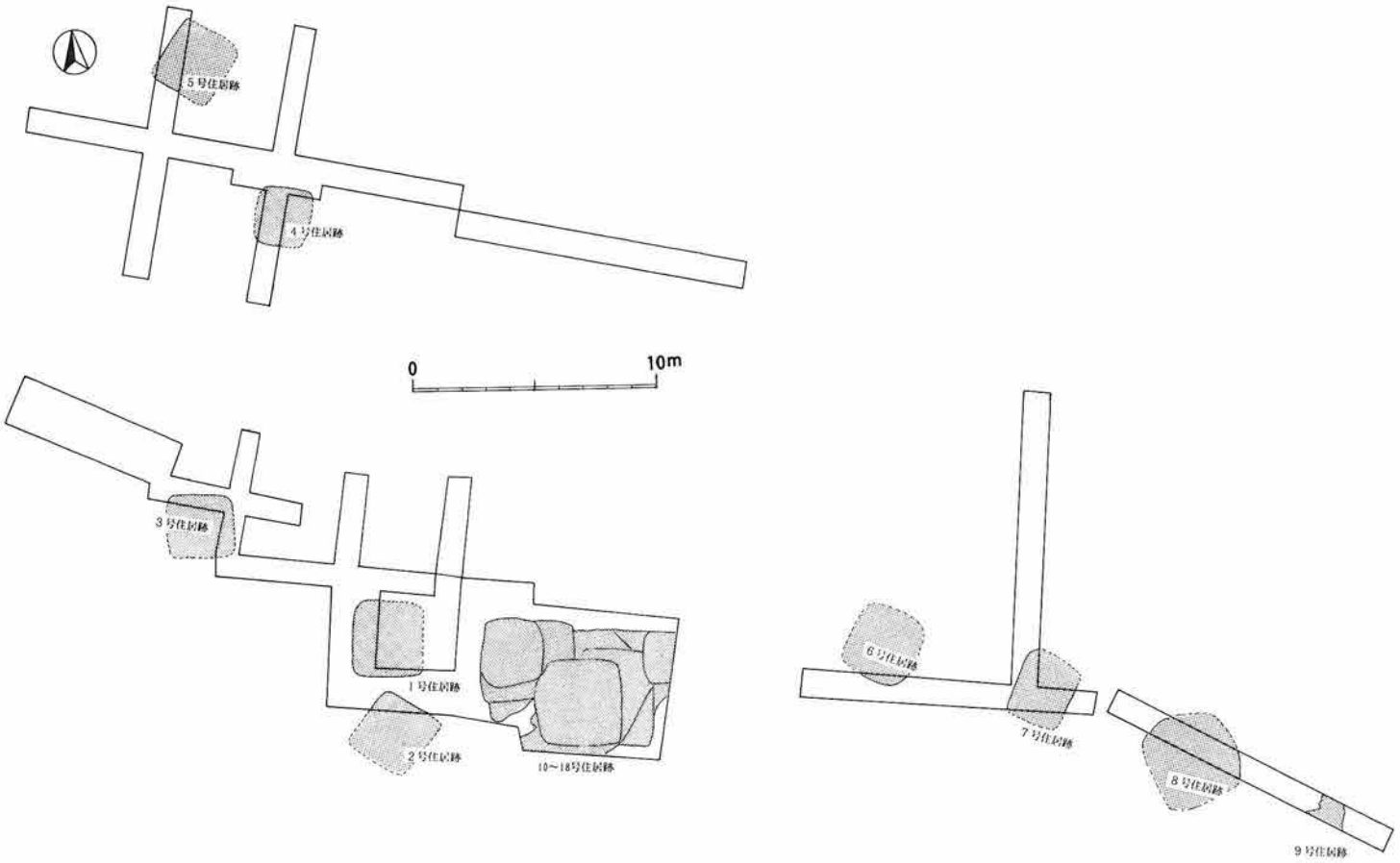
上城跡は与論城築城以前の按司時代（11～14世紀）の頃の城跡と考えられているが，トレンチ調査の結果確認された遺構は第3トレンチの炉跡状遺構のみであり，埋土や遺物等から城跡に係わる遺構とは考えられないものである。しかし伐採作業等により石灰岩を加工した城跡の区画（曲輪）と考えられるものが4カ所確認され，また，第3トレンチを設定した区域や第4トレンチを設定した区域，第5トレンチを設定した区域のそれぞれの西側には石灰岩がほぼ直線的になった部分があり，出入口と考えられるものがみられた。

第3トレンチを設定した区域の東側は比高差約3ｍの石灰岩崖があり，上部では石灰岩礫等が積み上げられてはいたが石垣としての確証は得られなかった。また南側においても石灰岩礫が積まれていたが石垣としての確証は得られなかった。

各区画の境等にのみ積まれている石灰岩礫に混じって砂岩礫が存在していることが確認された。この砂岩礫は与論島北東部で見られるものであり，ここから搬入されたものと考えられる。

上城跡の範囲は，石灰岩にみられる加工痕状のものをたどれば，第3トレンチを設定した部分から第5トレンチを設定した部分の西側の畑地までと考えると面積は約400～500㎡となり，やや狭小となり現在森林となっている部分を含めることも必要となるが確たる遺構が存在しないため明言することは差し控えたい。しかし前述の区域が上城跡の中心部であることは確かであろう。

現在の与論城跡の築城に際して，石垣石の不足が生じたためにこの上城跡の石垣石を利用し運んだという伝承がこの地区にある。いずれにしても与論城築城（応永12（1405）～応永30（1423）頃と考えられている）の際にこの上城は廃棄されると共に破壊され，一部の石灰岩の加工痕のみが当時を物語るものと考えられる。


5号住居跡
4号住居跡
0
10m
3号住居跡
1号住居跡
2号住居跡
10～18号住居跡
6号住居跡
7号住居跡
8号住居跡
9号住居跡

第8図　住居跡位置図

第5章　上城遺跡の調査

第1節　調査の概要

上城跡に伴う，掘立建物・居住区の有無を確認するために，6～25トレンチの確認トレンチを設定した。海岸側の防御を意識しているものと考えると，城跡の北側の同じ舌状台地上に，城に付随する施設の存在が予想され，更に北側には，東西方向に谷が走り，現在鍾乳洞の入り口となっているあたりに，自然湧水があったと伝えられており，居住に適していたと考えられた。

城域の中心部と考えられる石積みに隣接する北側の畑は，すでに天地返しを行っていたために，畑を一枚隔てて6・7トレンチを設定し掘り下げた。6トレンチでⅡ層を掘り下げていたところ，列石と黒色土の落ち込みが確認され，その性格を把握するために拡張した。拡張トレンチにおいて，直線的な掘り込みと，掘り込みに沿った列石を検出し，埋土に土器片・獣骨・礫を多量に含むことなどから，住居跡と判断し，更に拡張し発掘作業を行った。並行して，住居跡の関係する遺跡の範囲確認のために，周辺に8～25トレンチを設定した。住居跡が確認されたトレンチは，10・13・15・17・19・21・22・23トレンチで，トレンチでとらえた住居跡の上面で判断して，切り合いのないものから1～9号住居跡とし，切り合いの多い6トレンチの住居跡を10～19号住居跡（最大で9軒切り合っているものと判断）とした。

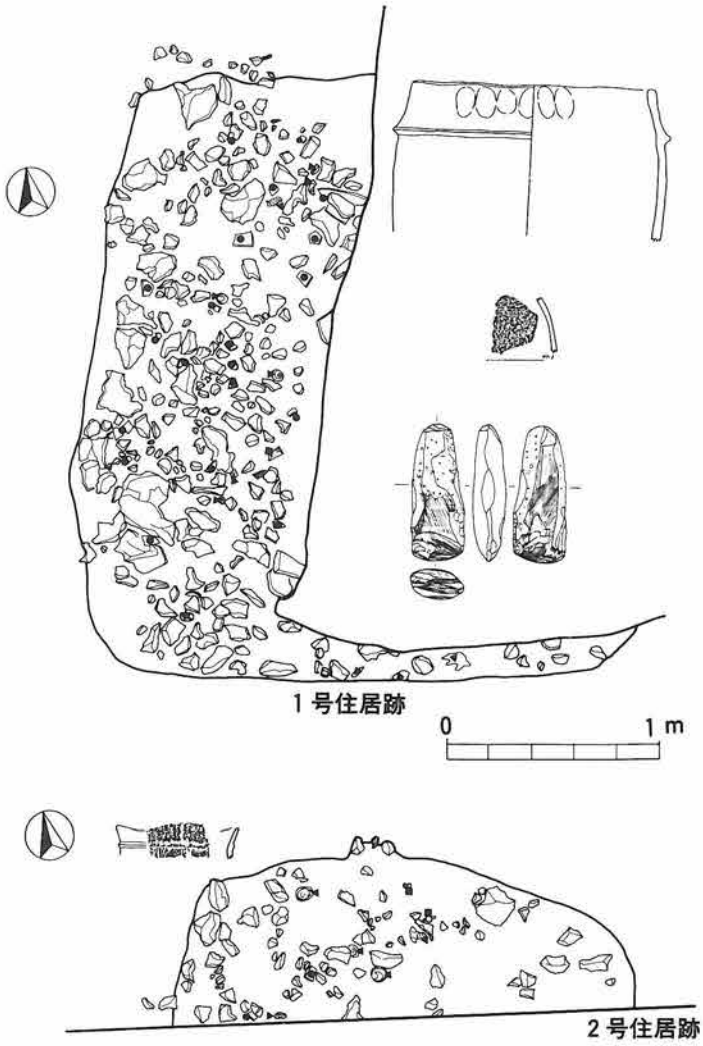
6トレンチにおいては，住居跡上面検出後，ベルトを残し掘り下げた。遺物・礫が多く出土し，礫が面的におさえられた段階で，出土状況を実測し，8グリッドにわけて発掘作業を行った。排土はグリッドごとにまとめ，すべて水洗をおこない，土器・獣骨・魚骨・骨製品などすべてを取り上げた。ベルトは，炭化物・焼土などを多く含んだ粘質の暗赤褐色土を埋土とする両端の住居跡を除いて，掘り込み面が出た時点で，取り除いた。完掘後，実測し，完掘状態で海砂をいれて床面保存を図った後，埋めもどしを行った。

1～9号住居跡については，検出面を実測し，表出している遺物のみを取り上げた。埋土は6トレンチと同様に，礫・魚骨・獣骨を包含し黒色を呈している。住居跡とともに，いくつかのトレンチにおいては，焼土・ピットが確認された。できるかぎりプランを把握するように努めたが，21～23トレンチにおいては，設定時のトレンチのみでの確認にとどまってしまった。このため6～9号住居跡については，いまひとつプランを明確にできなかった。1～9号住居跡上面を実測終了後，海砂で覆い埋めもどした。

このように，ほぼ時期を同じくする住居跡群を検出し，10～19号住居跡において，3タイプの住居跡が存在することが確認された。多量の遺物の中で，土器は，南西諸島・沖縄で出土する，宇宿上層式といわれる土器片や沖縄の宇佐浜式などを含み，これらは縄文時代晩期～弥生時代に比定されている。自然遺物も多量に出土し，当時の自然環境・食生活を考えるうえで手掛かりを与えるものである。

第2節　遺構

第8図は住居跡の位置関係を示したものである。22トレンチの北側と9トレンチの東側は，



第9図　1号住居跡・2号住居跡上面実測図

基盤岩である石灰岩が露出している。7トレンチ・24トレンチ・25トレンチ（第8図）では遺構・遺物は確認されず，西側へは広がりそうでない。5号住居跡（19トレンチ）の北側に，現在鍾乳洞の開口部がある。

1号住居跡（第9図）

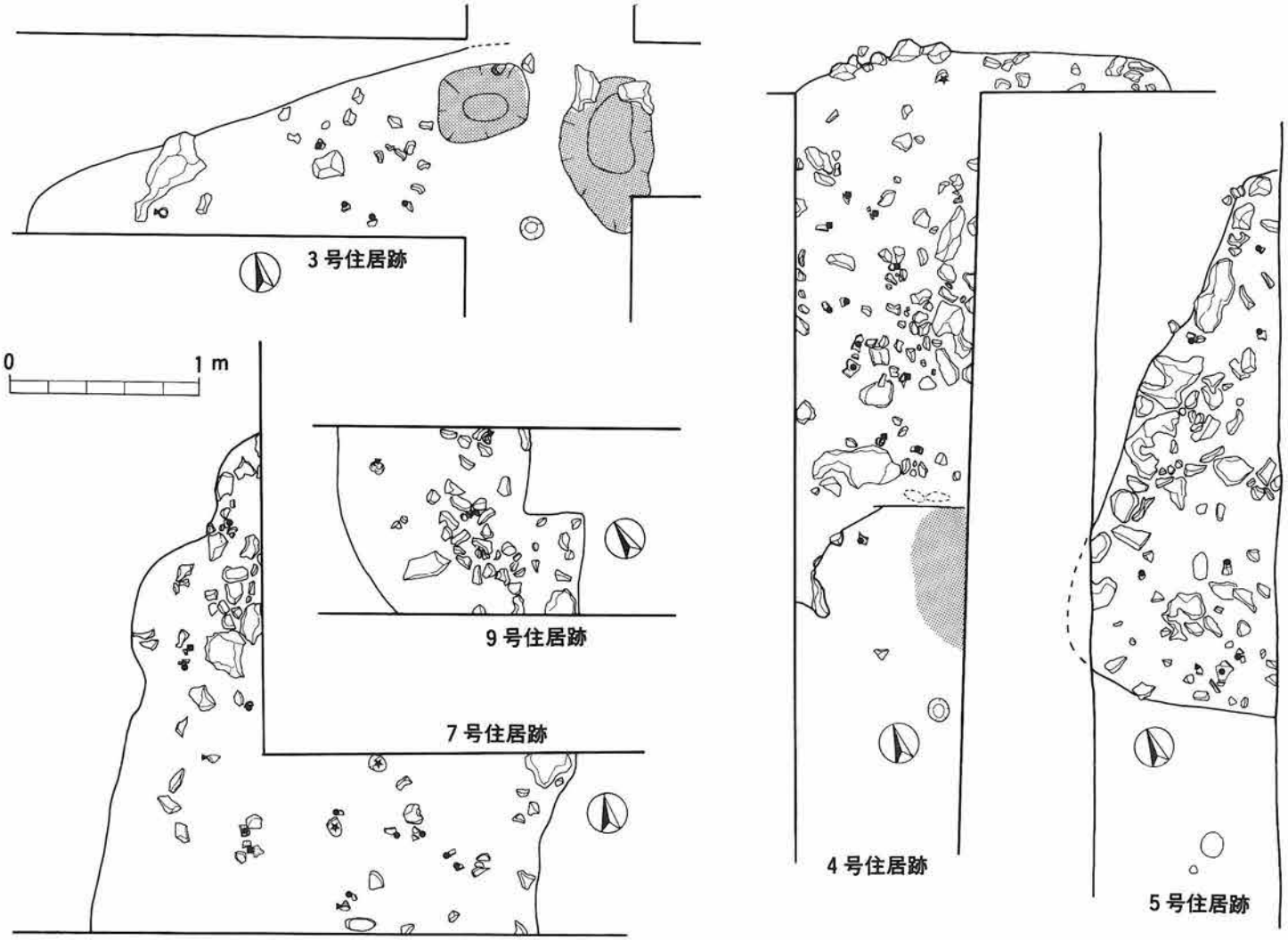
13トレンチに検出した。280×310㎝の隅丸方形のプランの住居跡と考えられる。石灰岩風化土の赤色と住居跡埋土の黒色は明確で，掘り込みの把握は容易である。その上面で把握した図であるが，北側にサンゴ礫の列があり，掘り下げるとこれらの礫のところまで，広がる可能性が強い。遺物は7，8の土器と10・11の石器が出土した。7の土器は，横方向に有軸羽状文を細沈線で施す。8は，礫を抱くようなかっこうで出土し，内傾気味の口縁で頚部に凸帯が巡る。10は，磨製石斧で，装着痕と考えられる擦れた面が全周をめぐり，とくに両側縁にはより滑らかな面が作られている。刃部側は左右主面とも擦痕が残り，研磨しているが，刃先は摩耗して鈍い。

2号住居跡（第9図）

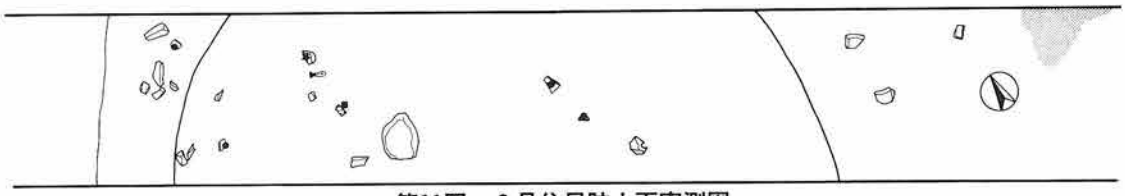
14トレンチ，1号住居跡の南側に検出した。1辺が220㎝の隅丸方形と考えられる。南側の残部は，天地返しを受けた畑との境界となっており，破壊された可能性が大きい。176の螺貝製貝斧と5の土器片が出土した。5は壺形土器の口縁部で，波状口縁下に突帯が巡り，突帯下に細沈線の有軸羽状文を縦方向に施している。

3号住居跡（第10図）

10トレンチにおいて，焼土・ピットを検出したため，17・18トレンチを設定し掘り下げたと



第10図　3号住居跡～7号住居跡・9号住居跡上面実測図



第11図　8号住居跡上面実測図

ころ，17トレンチにおいて，掘り込みが確認された。東側ははっきりしないが，1辺が300cm内外の，隅丸方形のプランが想定できる。焼土は2カ所あり，住居跡の内側か外側かは判断できなかった。焼土Aは36×48cmの長方形にひろがり，厚さ5cmに堆積し，焼土Bは，48×82cmの長円形にひろがり，厚さ3cmに堆積していた。

4号住居跡（第10図）

15トレンチに，南北220cmの幅で検出し，プランを把握するために，北端で9トレンチを拡幅した。およそ220×210cmの隅丸方形になるものと考えられる。南側で他の遺構と切り合っている可能性もある。南側に，住居跡に接して，南北約70cmの長さで焼土を検出し，さらに住居跡から108cm離れてピットを検出した。9の土器片が出土した。

5号住居跡（第10図）

19トレンチに検出した。一辺が300cm前後の隅丸方形になるものと考えられる。比較的大きいサンゴ礫が住居跡の外周をまわる。ピットを南側に検出した。6の土器片は口縁部で，細沈線が施されている。有軸羽状文を横方向に施したものであろう。そのほかに，口縁部が幅広に肥厚し，直立気味に立ち上がる土器片が出土した。

6号住居跡（第10図）

21トレンチに検出した。プランは確認しなかった。焼土が南側に広がっている。21～23トレンチを設定した畑は，北側で基盤岩が露出し，Ⅱ層の堆積状況も薄く，6号住居跡に関しては，掘り込みも，焼土も，他の住居跡と比較して明確でなかった。出土した土器片は細片で図化できなかったが，口縁部が幅広く肥厚するものである。

7号住居跡（第10図）

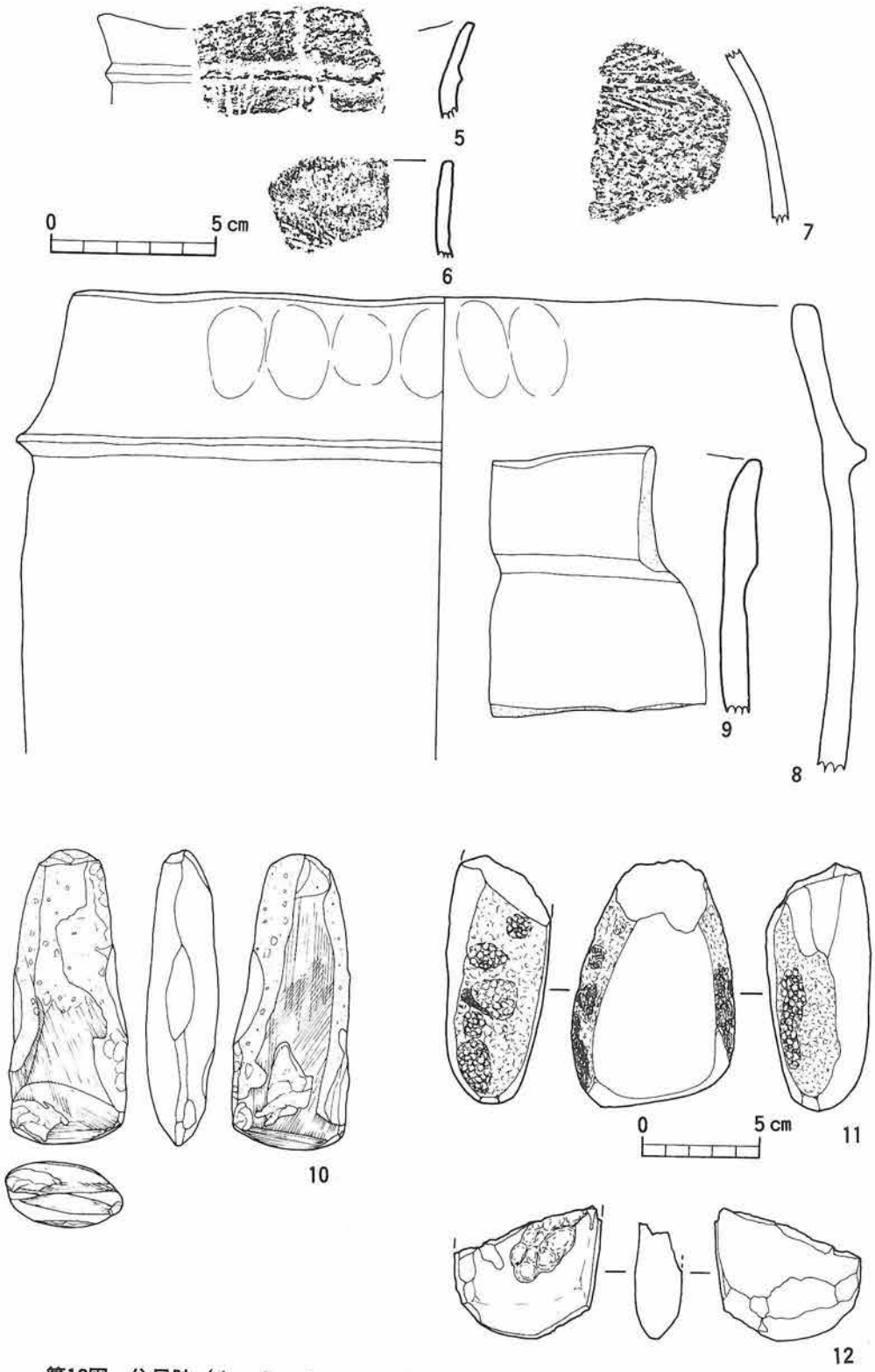
21・22トレンチで検出した。220cmの幅で検出したが，北側が不定形に掘り込まれており，プランは明確でない。

8号住居跡（第11図）

23トレンチに検出した。幅555cmで半円形に掘り込まれているように考えられる。西側に埋土の違いが観察され，内側が本遺跡で一般化される埋土で，外側が赤褐色を呈している。東側に焼土を検出した。出土遺物は12の石器で出土した。磨製石斧の刃部を磨石として再利用し，片面に敲打痕を残す。敲石と磨石を兼用したものとなっている。

9号住居跡（第10図）

23トレンチで検出した。上層が薄く，削平された可能性もある。不定型で，プランは不明である。



第12図　住居跡（1・2・4・5・8号住居跡）出土遺物

10～19住居跡（第13図～第18図）

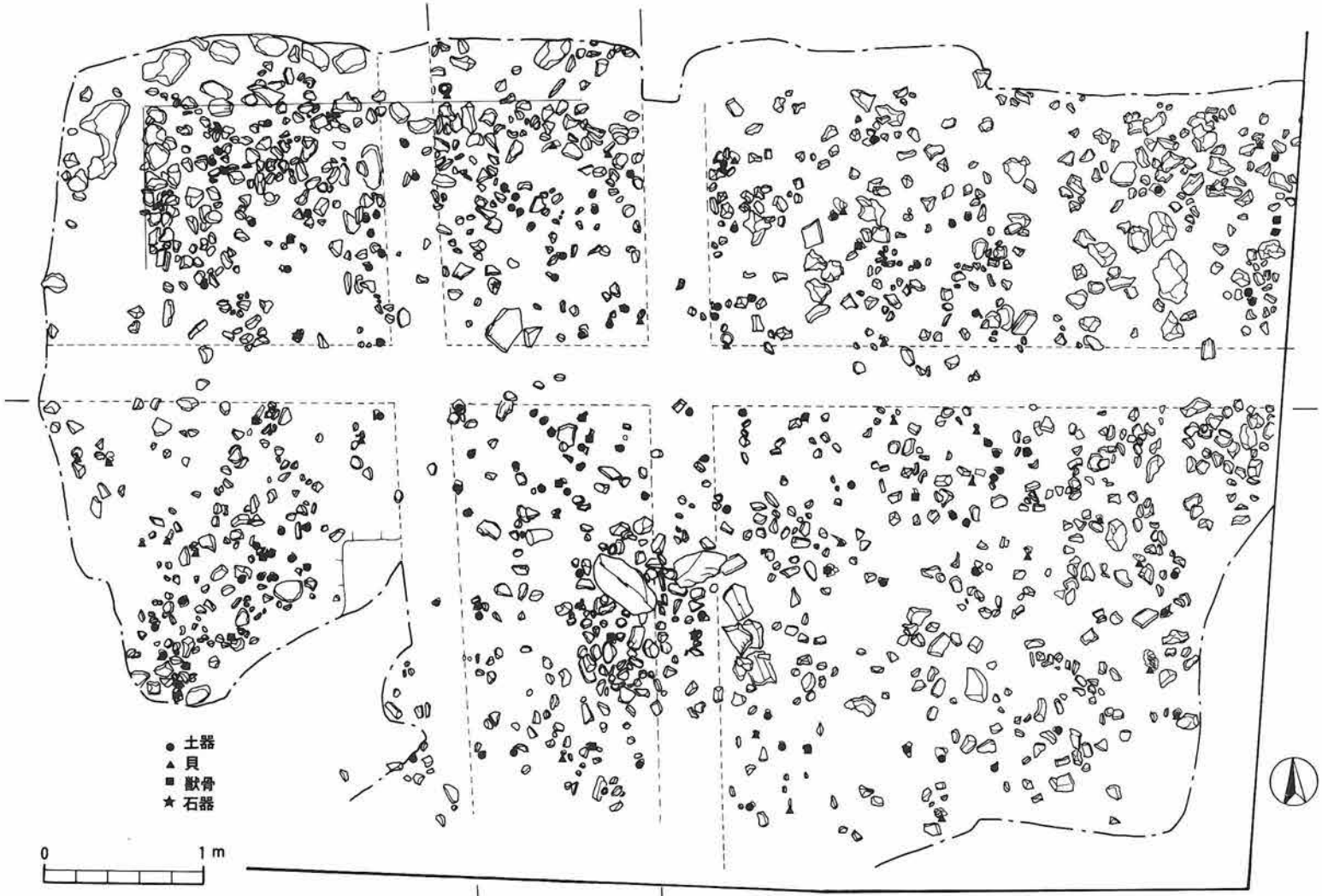
6トレンチで住居跡の北西の隅を検出し，6×9mに拡張した。検出面から，複数の住居跡が切り合っているものと判断して，住居跡の切り合い関係をつかめるように，セクションを設定し掘り下げた。第13図は住居跡の検出面を10cm程度掘り下げてから，実測したものである。サンゴ礫と角礫が散乱し，埋土に土器片・獣骨・魚骨が多く包含されている状況である。北西側に，サンゴ礫が集中して面を作っている部分があり，列石が直角となっている。敷石住居が考えられるならば，敷石住居跡のコーナー部分と判断できる（10号住居跡）。また中央部南側に，角礫で方形に囲ったと考えられる遺構らしきものがうかがえる。この段階までは，埋土は一様に黒色であったが，さらに掘り下げたところ，土色は全体的に暗褐色に変化した。中央部に石組遺構を検出し，そのまわりに暗灰色の砂の面がひろがっていた。この砂は，第16図のセクションの土層断面図に見られるように層となっており，砂層の広がりは，第14図にある範囲に広がる。石組遺構もこの砂層を掘り込んでいる（11号住居跡）。この砂層を掘り終えると，また暗褐色土となり，さらに東側・西側の両隅には，炭化物と焼けた豆粒状の砂礫，焼土を含んだ層があり，下にいくにしたがって粘土質となり，明赤褐色に色調が変化していった（16号住居跡・17号住居跡）。第15図は完掘状況の実測図である。焼土を8カ所に検出した。P1・P2は黒色土の埋土で，P4・P5・P6の埋土は暗灰色の砂であった。P1・P5・P9は，サンゴ礫がピット内に入り，P3ではかなり大きな土器の胴部の破片が出土した。P4～P6は，暗灰色の砂層を床面とする11号住居跡の柱穴と判断できる。また，この11号住居跡に，石組み炉としての石組遺構が，中央部にともなうものと考えられる。住居の構造上は4本柱が想定され，柱間からP8がこれにあたる可能性がある。しかしながらP7・P8は埋土が暗褐色土で，黒色土とも暗灰色砂とも異なっており，住居跡の切り合いが多いことからも，判断できない。

16号住居跡の床面の焼土に埋まって，21の壺形土器が出土し，同様に18号住居跡の焼土に埋まって36の壺形土器が出土した。第17図・第18図は住居跡内遺物の出土状況である。上層と下層に分かれて出土した。10号住居跡～14号住居跡に伴う遺物と，15号住居跡～18号住居跡に伴う遺物で分かれるものと考えられる。

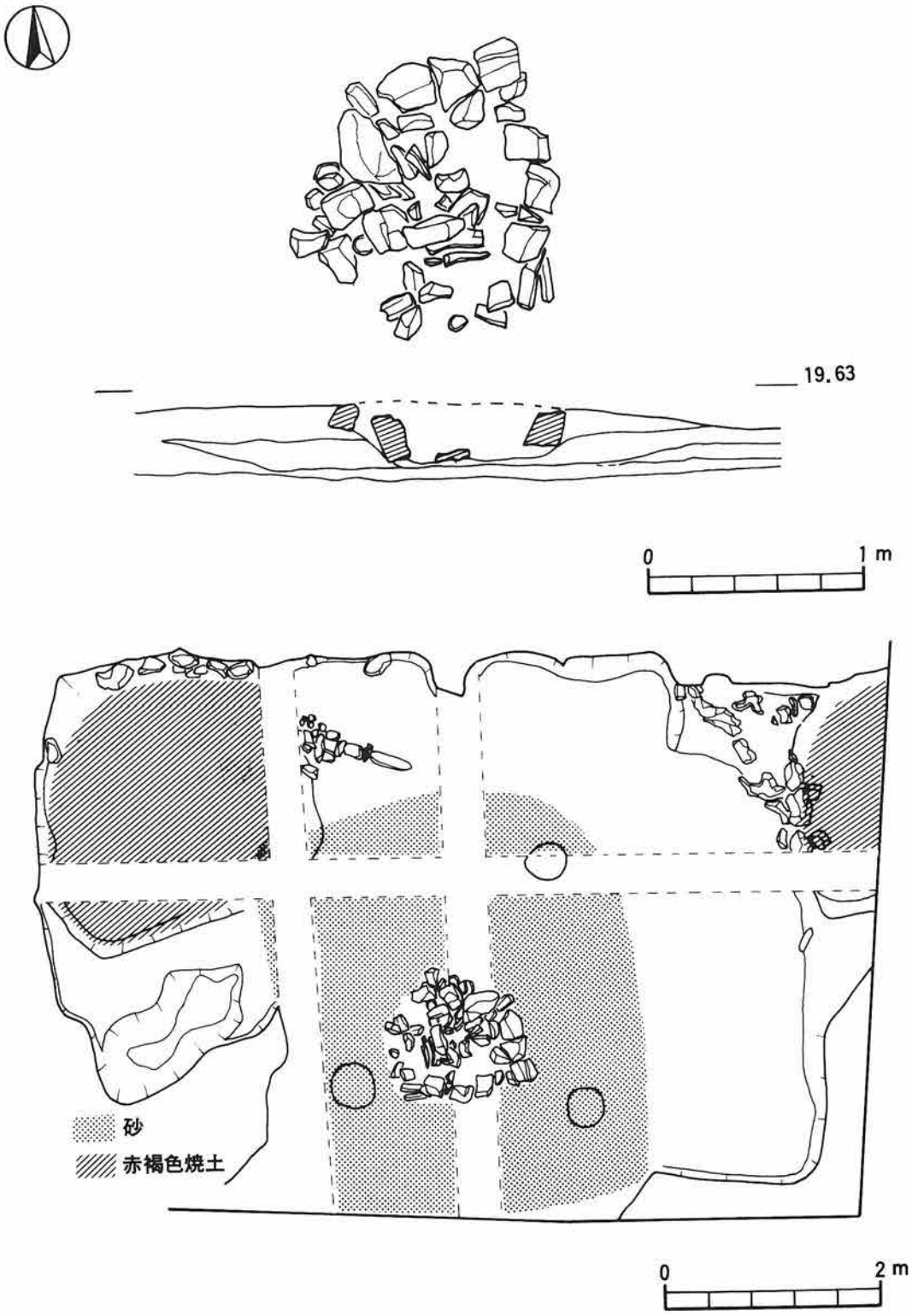
第3節　遺物

1）土　器（第19図13～第25図129）

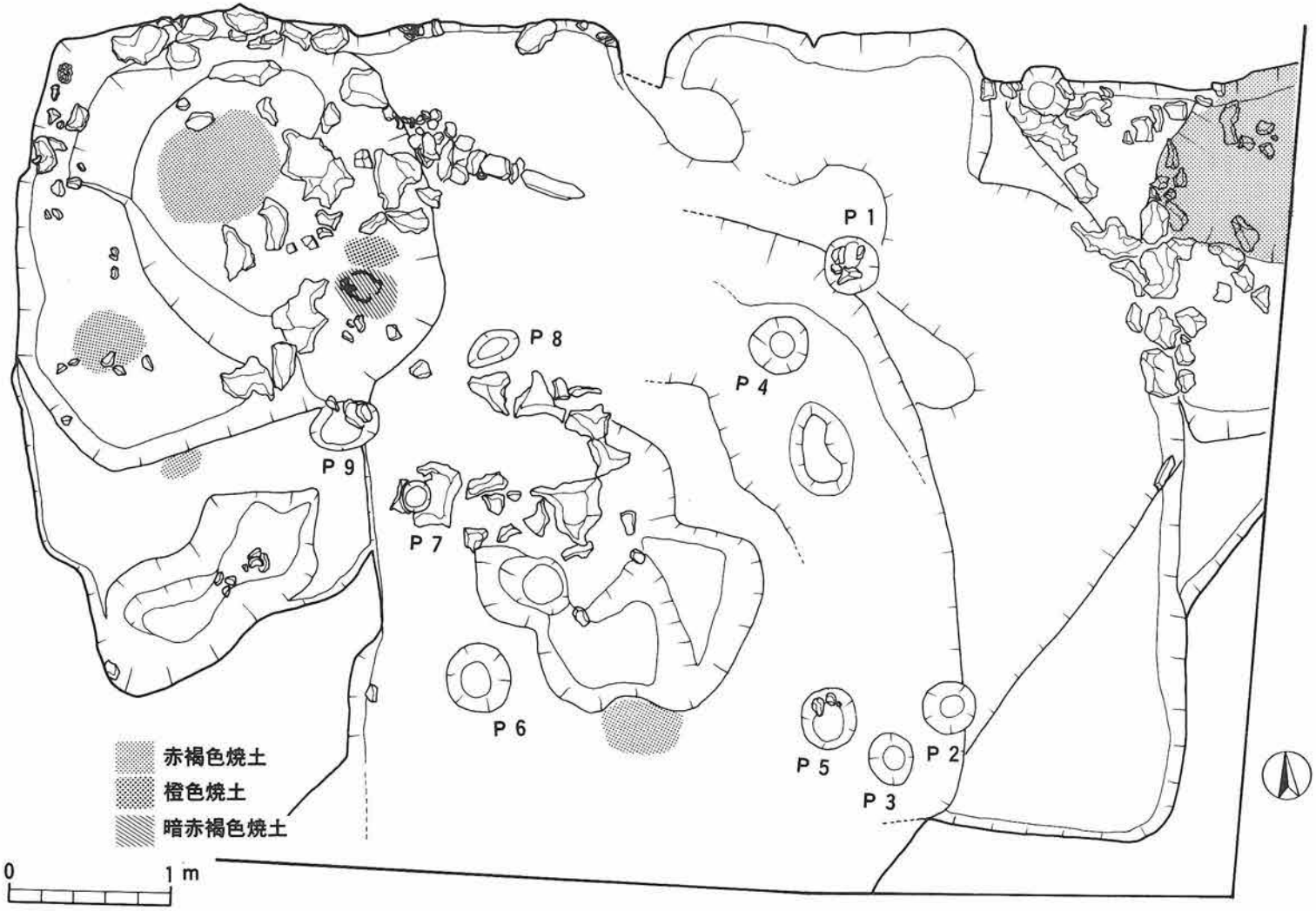
土器は，一部を除いて，粉質で器面の剝落したものが多く，また石灰分が凝着し，調整のわかるものは少なかった。埋土中のものは小破片が多く，量的にはかなりの量になるが，無文で，断面の磨耗も激しく，口縁部を中心に図化した。胎土は，すべて石灰岩細片や，海砂に由来とすると考えられるサンゴ微細片・砂礫を多く含む。多孔質のもの（26・42・53・58・118・119），雲母を含むもの（13・15・16・17・21・22・24・25・27・29・30・31・32・34・35・36・37・38・40・45・48・50・63・66・68・71・75・79・92・93・94・95・97・98・101・103・104・107・109・110・112・113・115・122）があり，色調は赤褐色～橙褐色を呈している。



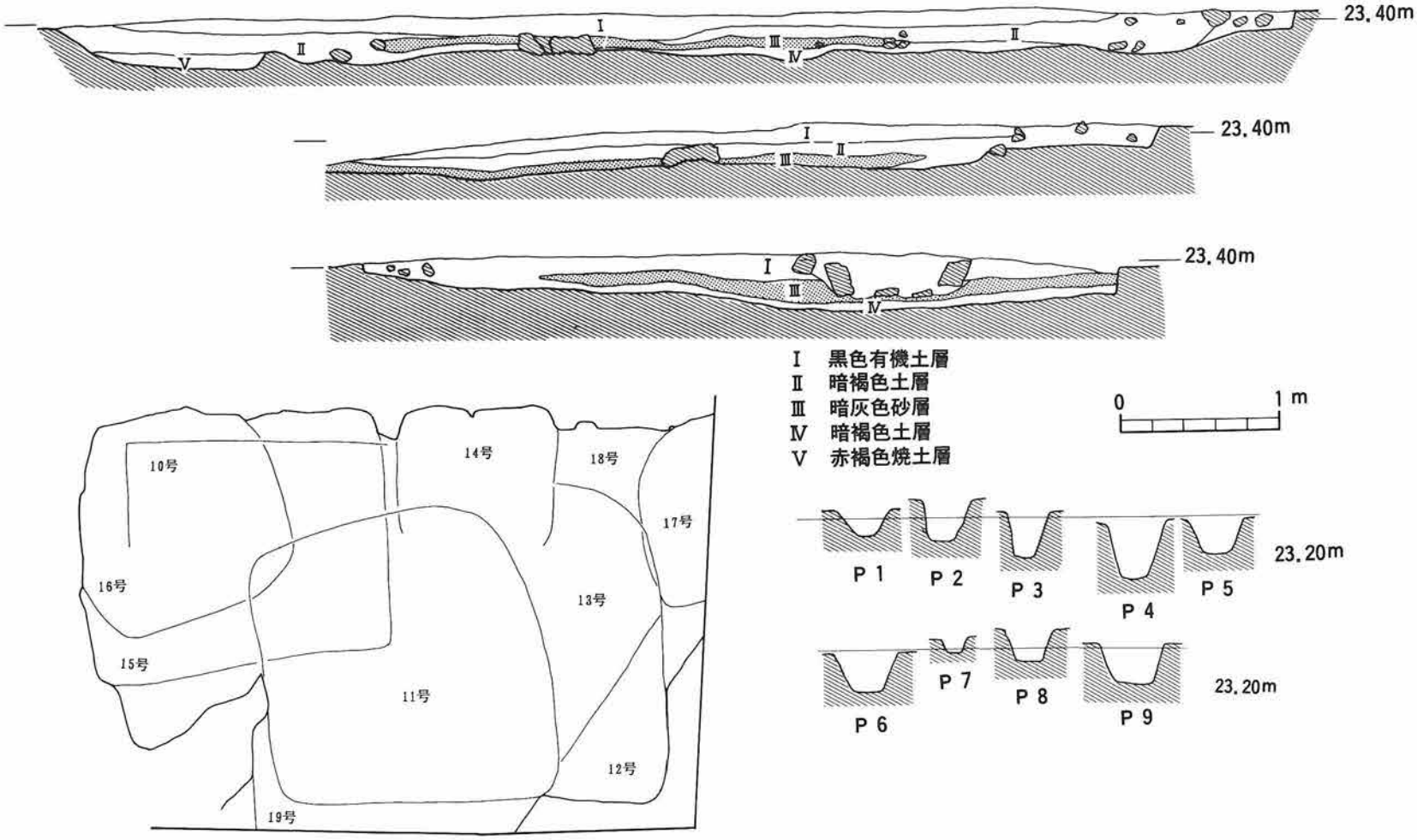
第13図　10～19号住居跡上面実測図



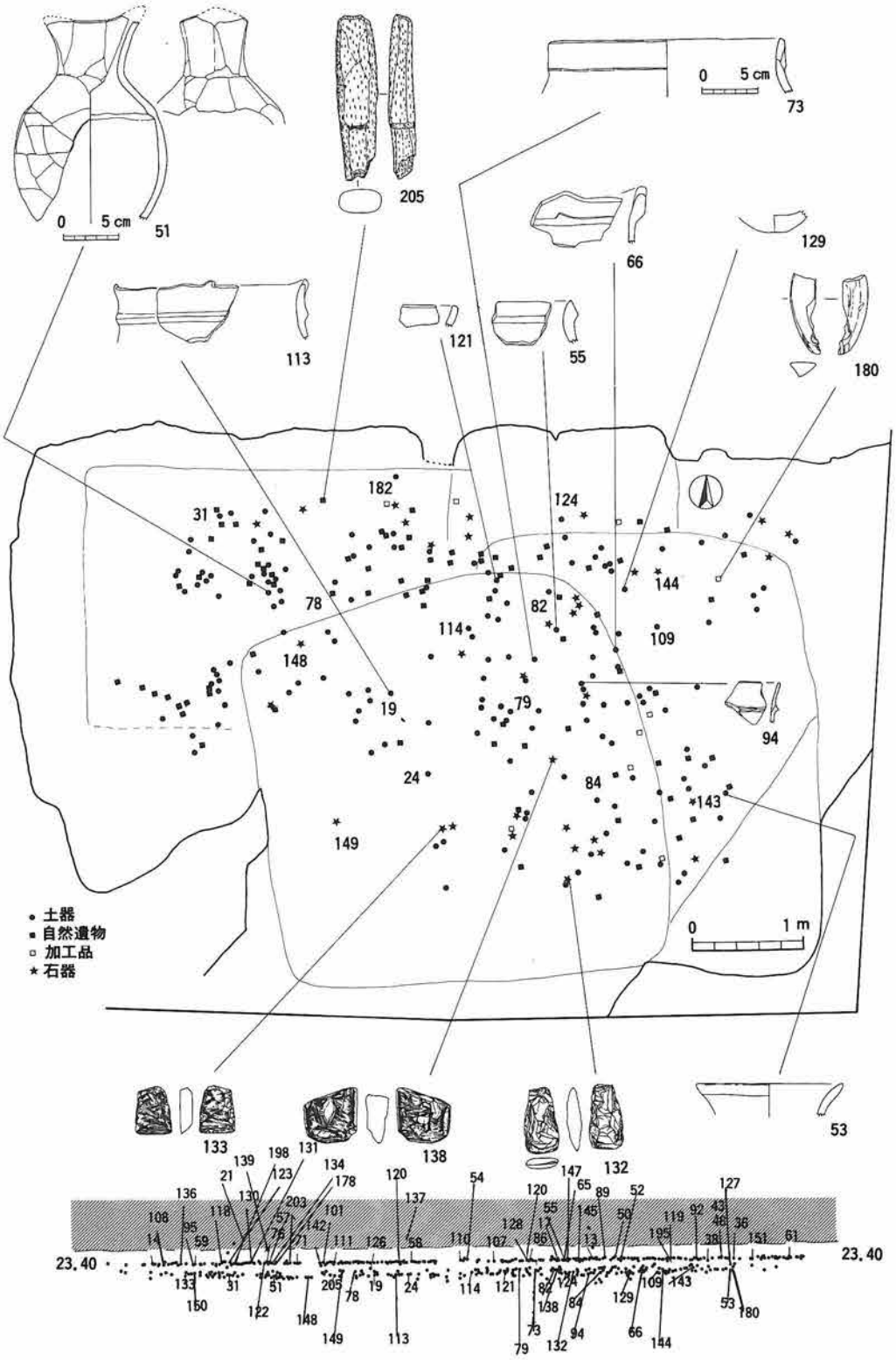
第14図　10～19号住居跡石組遺構及び住居跡検出状況



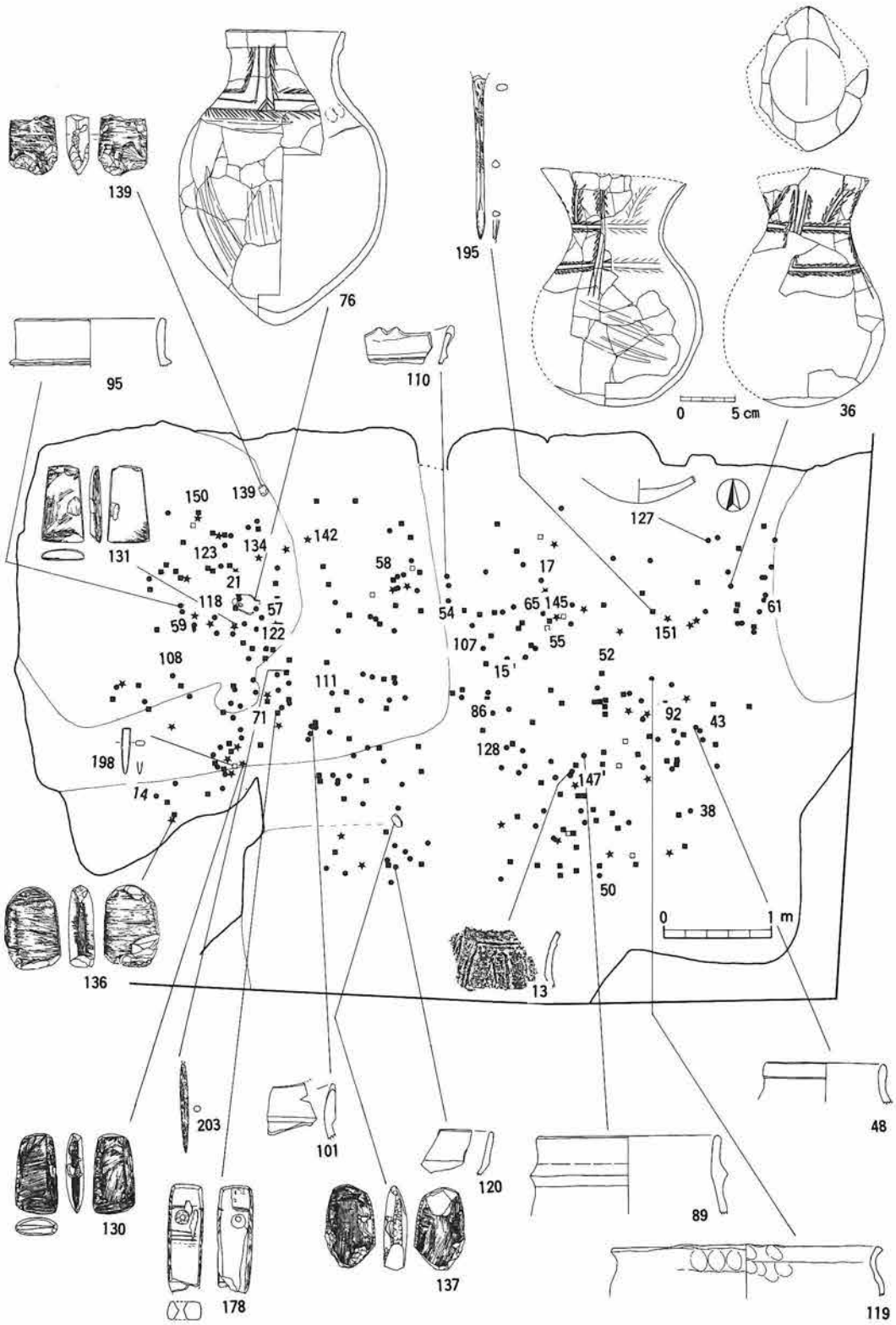
第15図　10～19号住居跡完掘状況実測図



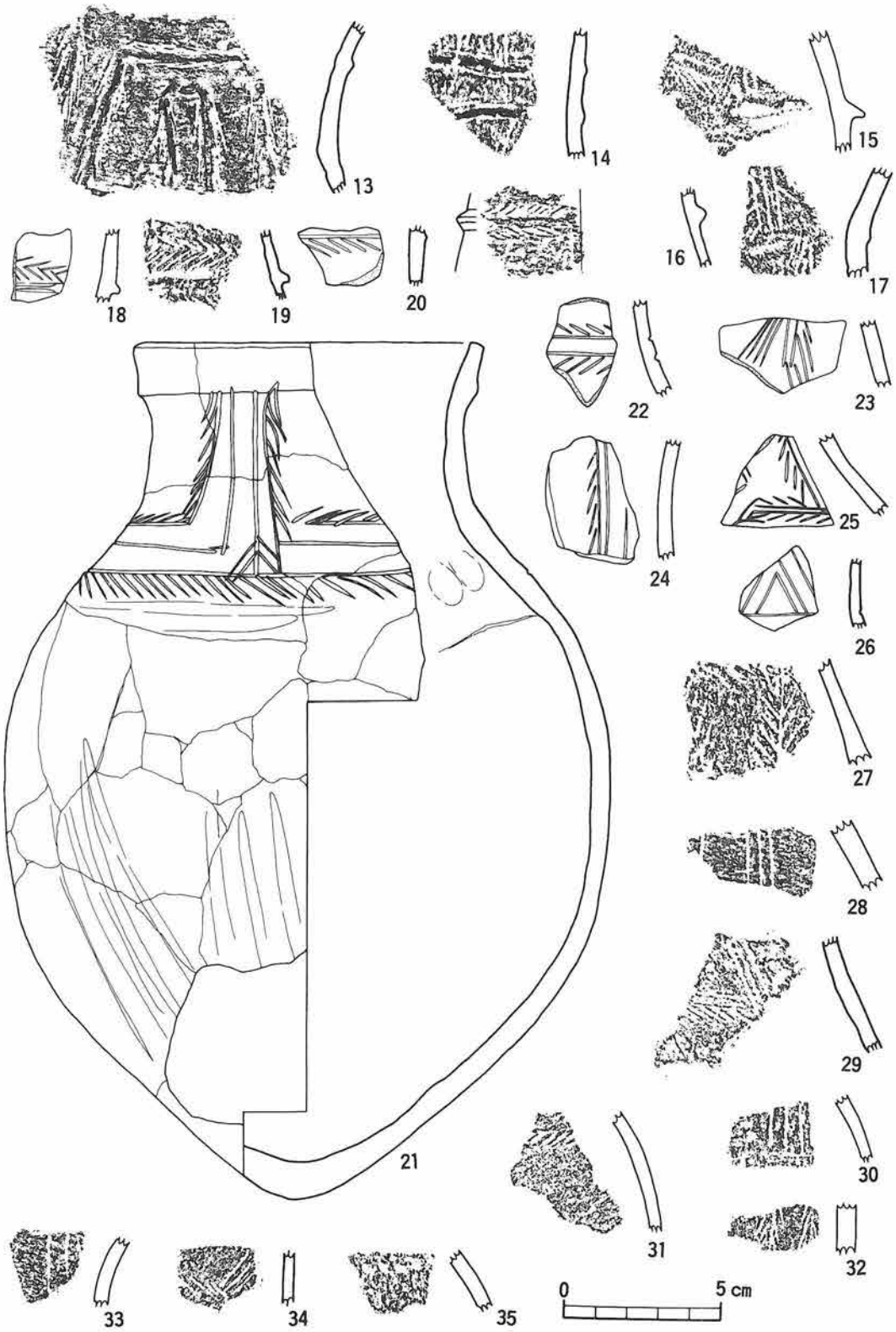
第16図　10～19号住居跡土層断面図及びPit断面図・10～19号住居跡切り合い関係



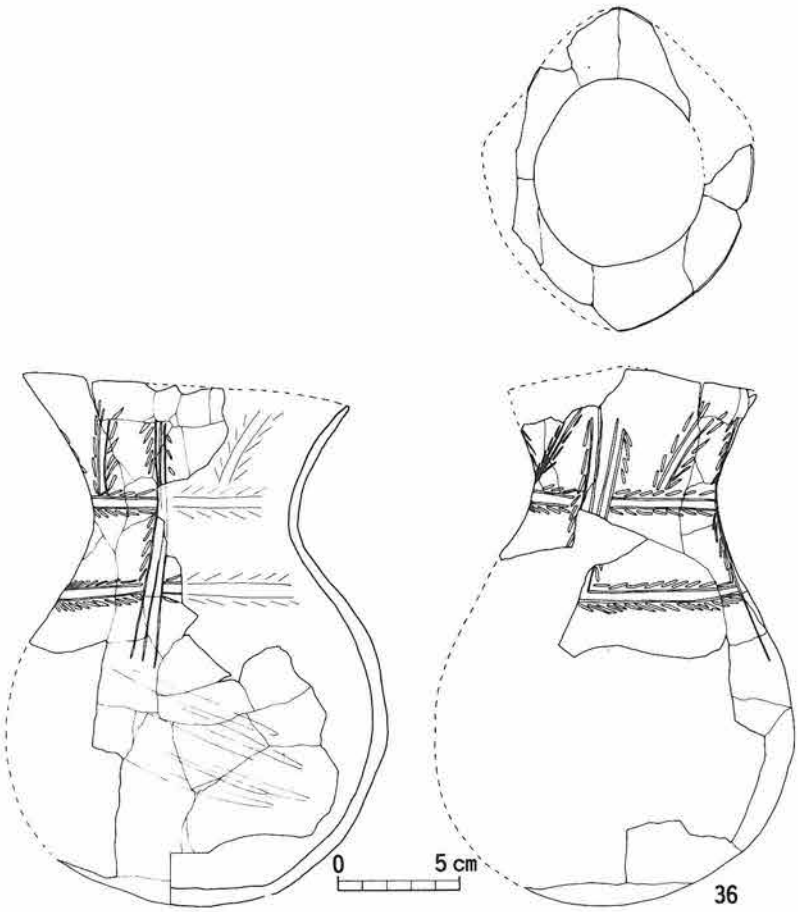
第17図　10～19号住居跡遺物出土状況（上層）



第18図　10～19号住居跡遺物出土状況（下層）



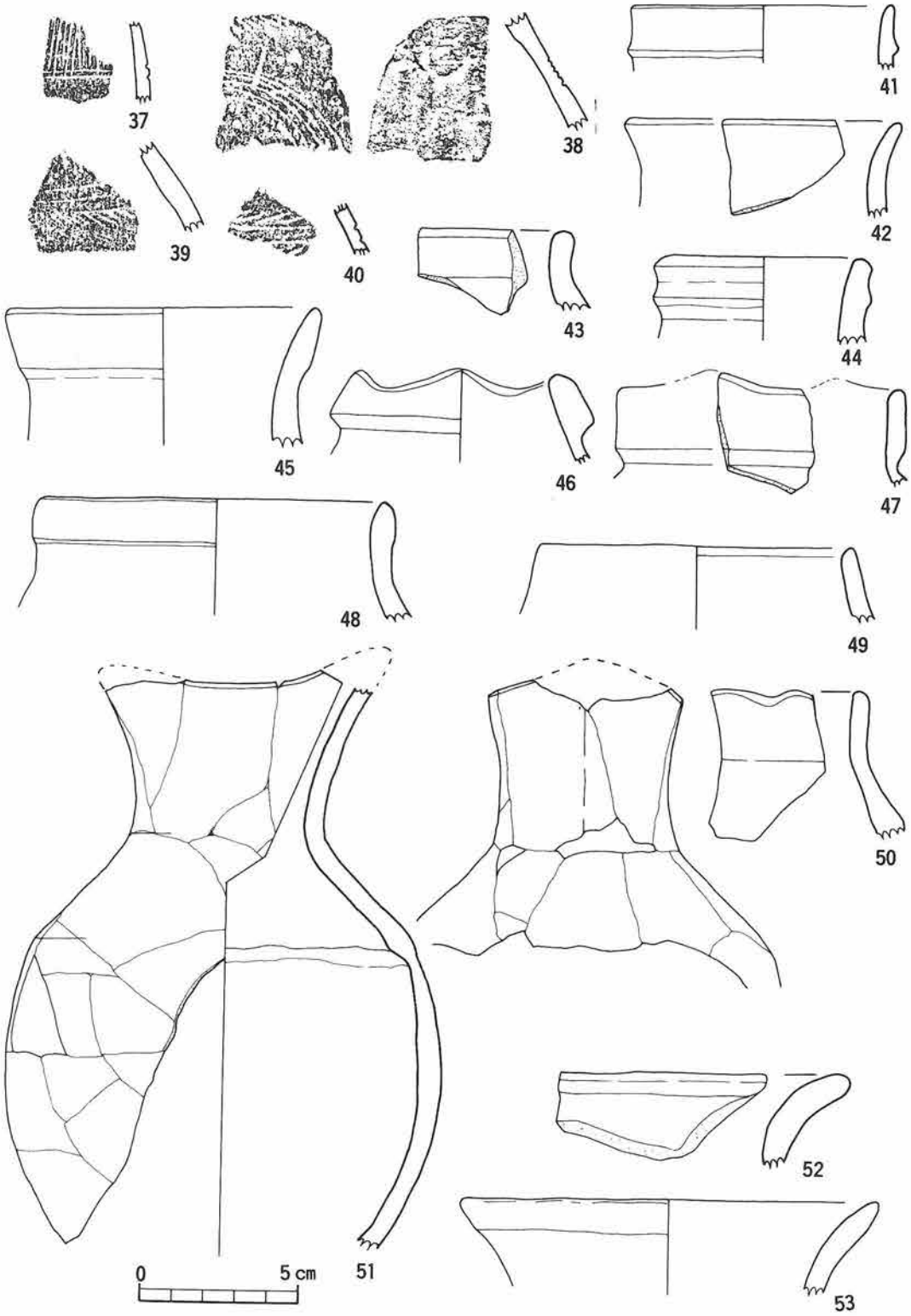
第19図　10～19号住居跡出土土器(1)



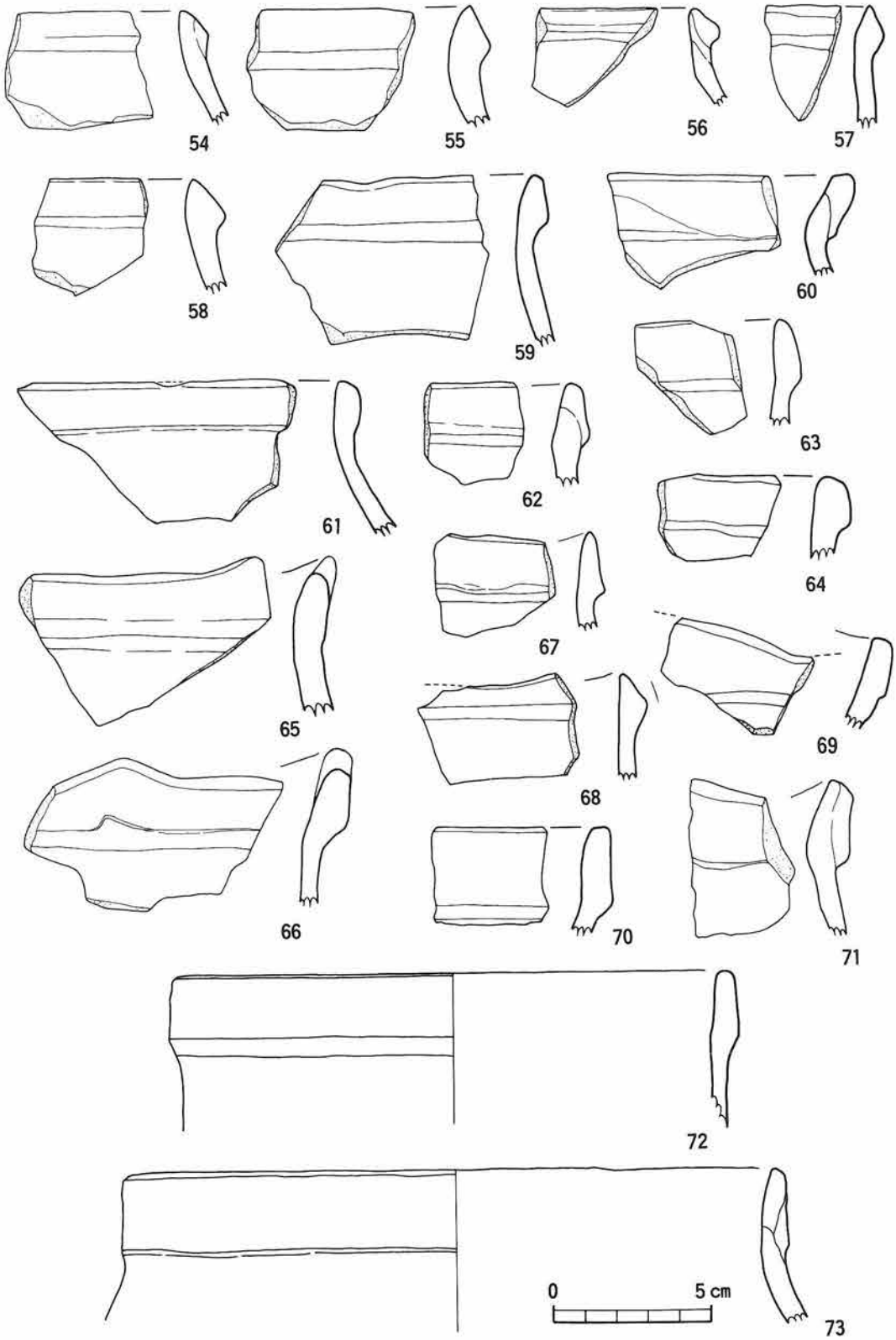
第20図　10～19号住居跡出土土器(2)

粉質のもの以外に，３㎜～５㎜の角礫を特に多く含み，赤褐色を呈し焼成の良い土器の一群（41・65・69・73）と，細砂礫を含み，暗茶褐色～黒色の焼成の良い土器の一群（48・55・58・66・68・71・93・94・95・96・104・109・110・112・113）が観察できる。復元形で判断して大型のものはなく，底部は平底はまったく見られなかった。細沈線の文様をもつものは，ほとんどが，胎土に雲母を含み，器壁はうすく，焼成も一般に良く，おそらく大部分の個体の器形は，壺形であると考えられる。13～53は壺形土器，54～119は深鉢形土器，120～122は浅鉢形土器，123・124・126は胴部の破片，125・127～129は底部に，それぞれあたる。

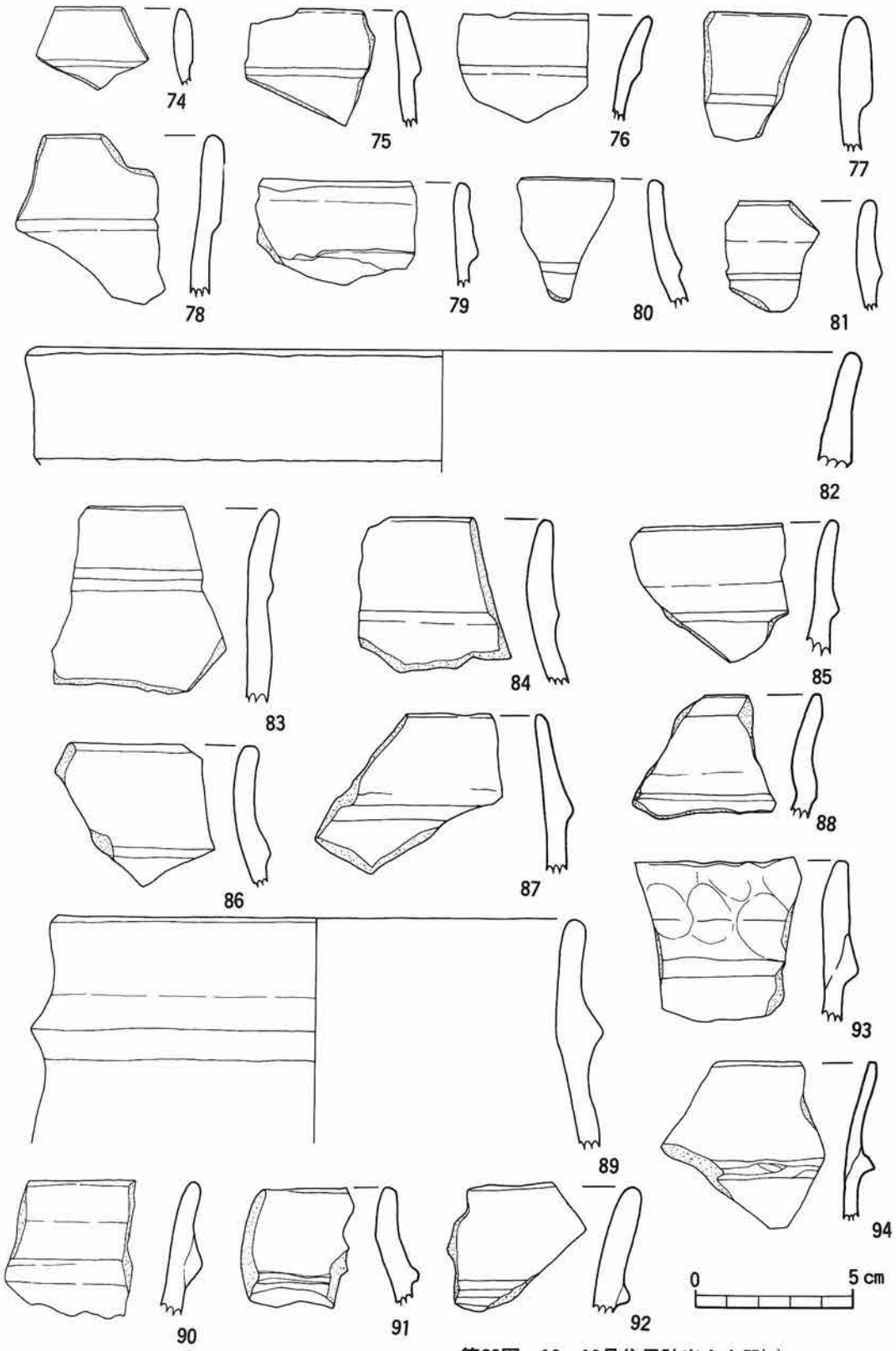
13・14は，細い突帯を貼り付け，13は突帯の両側に有軸羽状に細沈線を施し，14は横方向の突帯の両側に細沈線を引き，それを縦沈線でつないでいる。15～20は，13と同様に細い突帯と細沈線を施しているものである。15については，外耳土器の可能性が強い。21～40は細沈線で文様を施した土器である。21・36は，それぞれ住居跡の焼土に埋まって出土した完形品である。



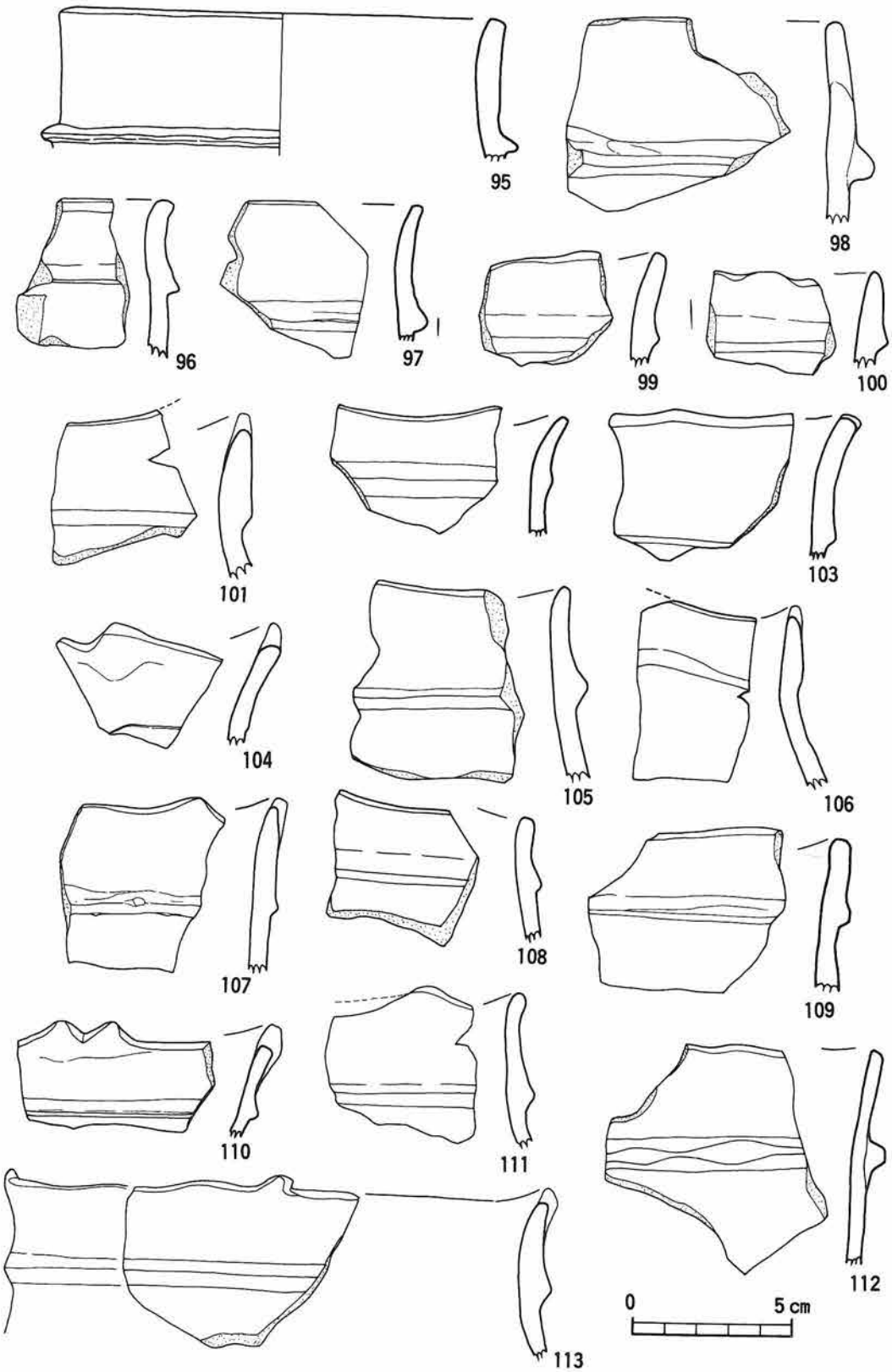
第21図　10～19号住居跡出土土器(3)



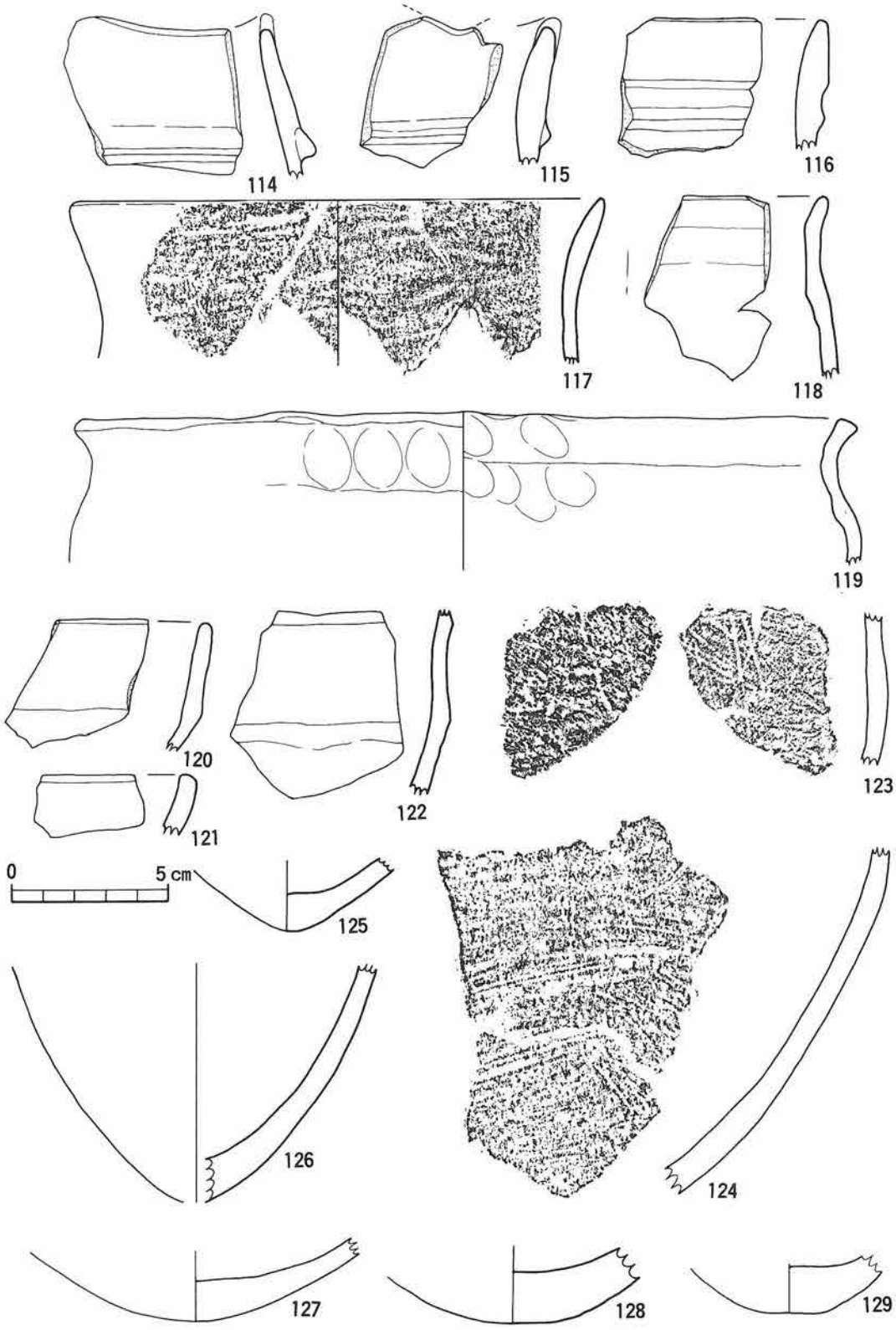
第22図　10～19号住居跡出土土器(4)



第23図　10～19号住居跡出土土器(5)



第24図　10～19号住居跡出土土器(6)



第25図　10～19号住居跡出土土器(7)

いずれも2次焼成を受けたものと考えられる。21は口縁部が幅広に肥厚し，文様は口縁下から頚部に施文され，長円形の胴部に，底部は尖底気味の丸底である。文様は，3本の縦・横の沈線を軸にして，両側に短沈線を羽状に施していく。内側に粘土の積み上げ痕を残し，外側では胴部にヘラ状工具による研磨痕がある。36は，口縁端部の傾斜と，平面形から，水差し形になるものと考えられる。文様構成は21と同様で，有軸羽状文を沈線で施す。縦方向へ胴部までのびる長い沈線は，注ぎ口を正面とした場合，正面と裏面は4本で，側面は3本ひかれている。器壁はうすく，胴部に研磨痕を残し，底部は丸底である。底部は円盤状に割れていて，内側は平たくなっている。38は非常に焼成がよく，内側に粘土の積み上げ痕があり，文様は横方向に有軸羽状文と，同心円状に5本の沈線を孤状に施文している。色調は，外側が淡褐色，内側が黒色を呈し，胎土はよく精選されている。

41～53は無文の壺形土器である。13～40の有文のものと胎土・焼成とも異なり，深鉢形土器などと同じ様相を呈している。46・47・50は波状口縁である。51は黒色土層からの出土であり，10号住居跡に伴う可能性が最も強い。上から見ると，頚部は内側が楕円形となり，外側は長径側両端に稜をつくりラグビーボール形になる。口縁残存部の形状と併せて考えると，水差し形に復元できる。器面が荒れ調整は不明であるが，内側に粘土の積み上げ痕があり，この部分で肩部に稜をなす。

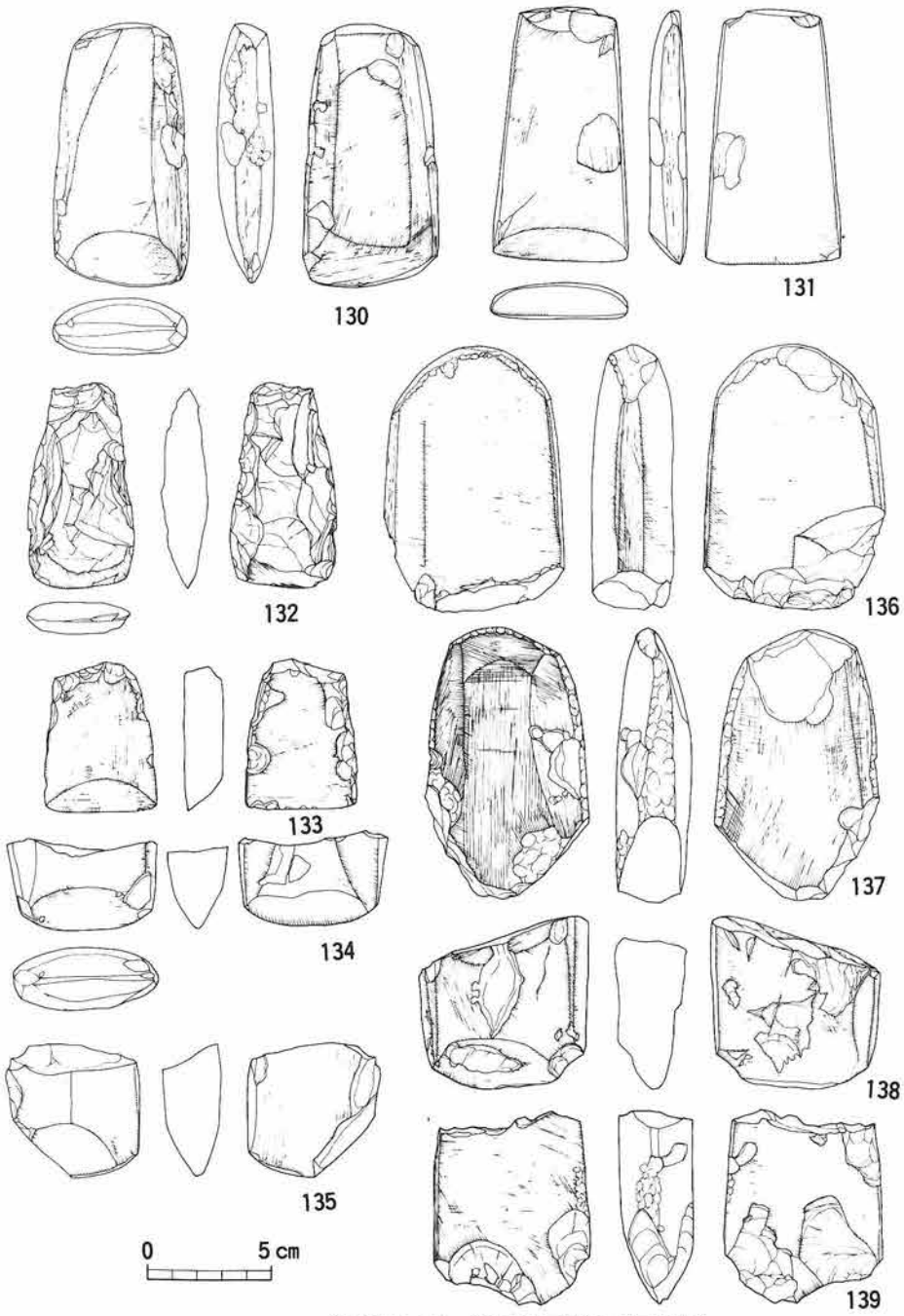
深鉢形土器は，口縁部の形状で分類すると，以下に分けられる。54～59・67・68は肥厚した口縁部が断面三角形になっているものである。60～66・69～71は幅広の粘土帯を貼り付け，断面形が方形となり，肥厚帯が外側に面を作る。72～89・101・103・104・106は肥厚帯が長くなり，口縁端部に近くなると厚さを減じ，頚部で段を作る。90～100・102・105・107～116は，頚部に突帯を貼り付けるものや，貼り付けた粘土帯を整形し突帯様に見せるものである。117～119は無肥厚口縁の深鉢形土器である。無肥厚口縁を除くと，いずれも平坦口縁と波状口縁がある。波状口縁の形状は，66・103・104・107・110・113でみるように，粘土帯を貼り付ける際に作り三角形状になるもの（66・104），かすかに波状のもの（103・107），ヘラ状工具により明確に形を作り出すもの（110・113）がある。117は暗褐色を呈し，内側に条痕を残し，外側には横方向に細沈線を不規則に引いている。93・119は指頭圧痕を顕著に残す。

120～122は浅鉢形になるものと考えられるものである。多数の土器片の中で，この3点のみであった。底部は，尖底気味の丸底が一般的であった。129は，かすかに平底が残る。

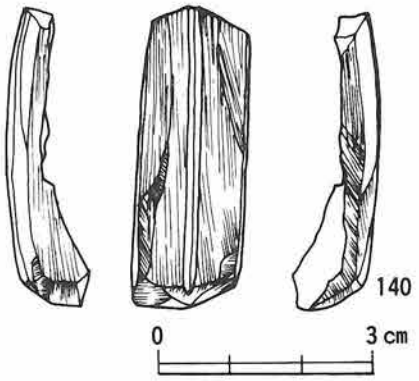
これらの土器のうち，明確に上層から出土したものが，19・24・31・51・53・55・66・73・78・79・82・84・94・109・113・114・121・124・129で，下層から出土したものが13・14・15・17・21・36・38・43・48・50・52・54・57・58・59・61・65・71・76・86・88・89・92・95・101・107・108・110・111・118・119・120・122・123・126・127・128である。

2）石　器（第26図130～第29図151）

石器は，磨製石斧（130～135・141）・磨石，敲石（142～149・152）・打製石斧（150）・石皿（153）・有溝石製品（140）・円盤状石器（151）・石斧を折損後に転用した敲石，磨石



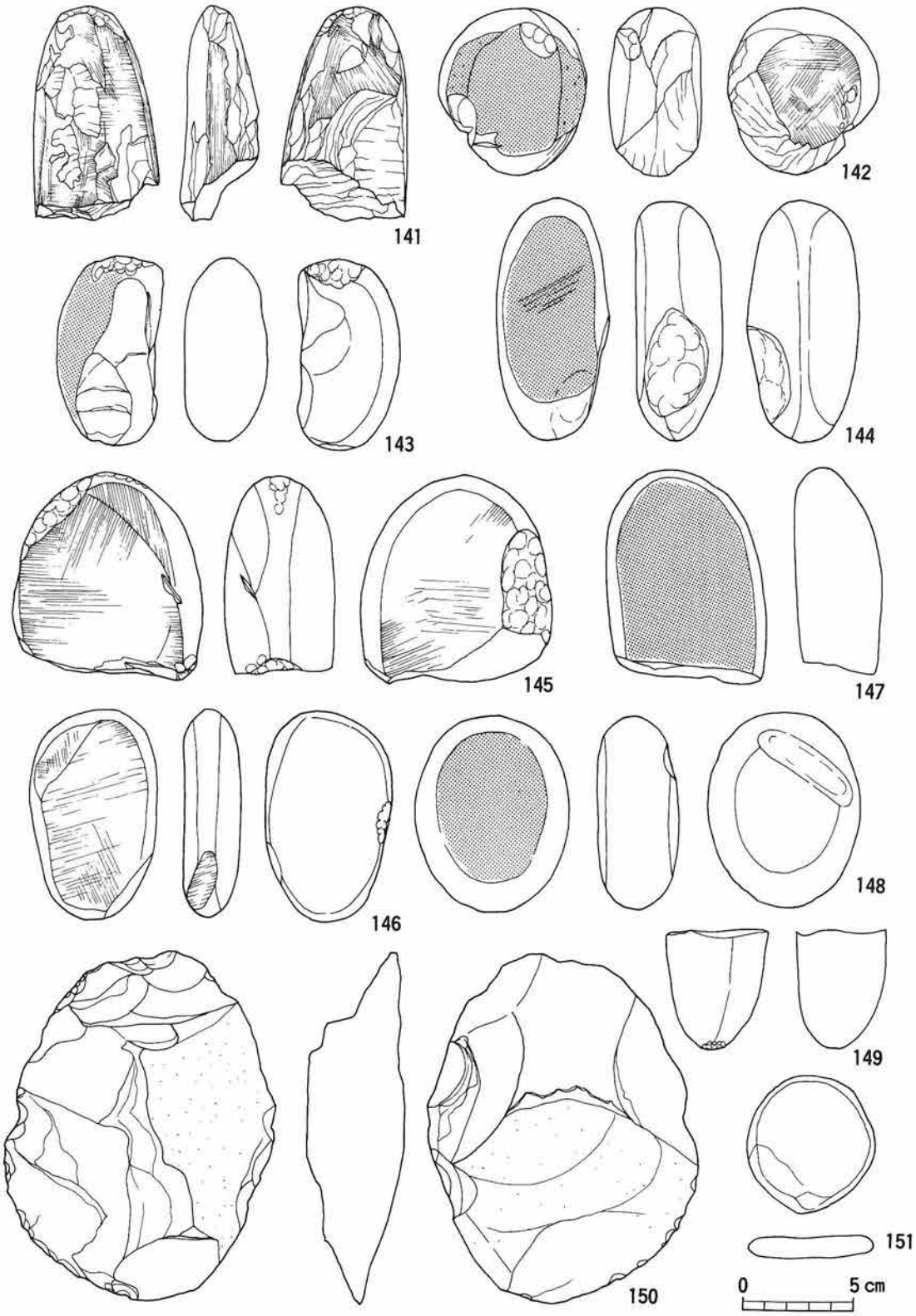
第26図　10～19号住居跡出土石器(1)



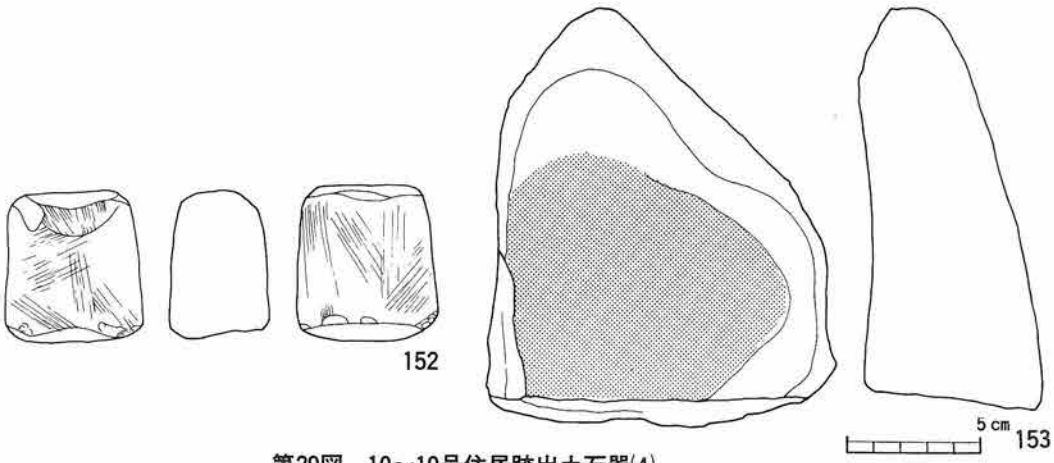
第27図　10～19号住居跡出土石器(2)

（136～139）が出土した。

130は，主面・側面共に擦痕が残り，基端面では，細かい敲打のために面が荒れている。両側面に敲打痕がある。刃先は基端面と同様でつぶれて鈍くなっている。131は，磨製偏平片刃石斧である。刃部は鋭い。132は小型で，刃部のみ磨る局部磨製石斧である。両主面とも整形時の剥離面を残すが，稜がかなり摩耗している133は用途・形状の判断が難しいが，ここでは一応磨製石斧として分類して，資料の増加を待ちたい。よく研磨されている。折断部などの剥離面の稜の摩耗が見られる。134・135は，刃部にあたり，再利用された形跡は観察できない。136は基端面に，石斧としての機能をもっていたときの面の荒れがうかがわれる。その後に基端面に新たな敲打痕があり，再利用されたものと考えられる。敲打痕は基端面だけであり，おもに磨石として使われたものと考えられるが，他のものと比べると折断部の稜が明確で，短期間使用されて破棄されたとも考えられる。137は周縁部全体に，敲打痕があり，磨石・敲石として兼用されたものと考えられる。138は，敲打痕は見られず，折断面に擦痕をもつ面を作っている。磨石とし使われたものであろう。139は側面に敲打痕があるが，刃部の剥離面や折断部の稜はシャープで，136と同様に考えられる。140は，チャートを研磨して，残存している一面に溝を一条掘り込んでいる。破損品で，用途・形状は不明である。方向を変えながら研磨したため，研磨面が多く，丁寧に磨いた様子がうかがわれ，装飾品の可能性もある。141は，基端面に敲打痕がある。142は，磨石であるが，擦痕の確認できなかった面の滑らかな面と，ややザラザラした面がその両側にある。143は，長軸の両先端を敲打し，側面の一面に滑らかな研磨面をもっている。144は3面の平坦面のうち，一面に研磨面があり，かたよった敲打痕をもつ。145は敲打痕に2カ所の明確な痕跡と，弱い痕跡がある。周縁部のほかに折断部と周縁部の境にあたる角張った所を使用している。146は片面に研磨面をもち，側縁部に小さな敲打痕がある。研磨面からは，滑らかな面（中央部）とザラザラした面がある。150は打製石斧で，土掘り具の用途が考えられる。151は円盤状の石器で，用途不明である。152は長円柱形の磨石で，かすかに下部に敲打痕がある。153は，焼けたため赤く変色している。



第28図　10～19号住居跡出土石器(3)



第29図　10～19号住居跡出土石器(4)

第２表　上城遺跡石器計測表

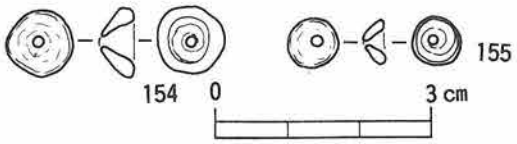
No.	器　種	石　材	出土区	最大長cm	最大幅cm	厚さ cm	重量 g	備　考
10	磨製石斧	安山岩	1号住	12.7	5.1	3.0	310	
11	敲　石	結晶片岩	〃	10.6	6.9	4.5	510	
12	敲石・磨石	輝緑石	8号住	6.7	4.6	1.8	90	
130	磨製石斧	輝緑石	10～19号住	10.6	5.4	2.4	255	
131	〃	黒色片麻岩	〃	10.3	5.4	1.7	180	
132	〃	千板岩	〃	8.2	4.3	1.9	90	
133	〃	輝緑石	〃	5.8	4.5	1.5	70	
134	〃	砂　岩	〃	5.8	3.7	2.3	75	
135	〃	粗粒玄武岩	〃	5.4	5.3	2.4	95	
136	敲石・磨石	輝緑石	〃	10.7	7.1	3.3	440	石斧転用
137	〃	安山岩	〃	10.8	6.5	3.2	350	石斧転用
138	〃	輝緑石	〃	6.8	6.2	2.7	200	石斧転用
139	〃	変成砂岩	〃	7.6	6.2	2.8	220	石斧転用
140	有溝石製品	チャート	〃	4.1	1.5	0.5	7.3	用途不明
141	磨製石斧	輝緑石	〃	9.6	5.6	2.8	225	
142	磨　石	輝緑石	〃	7.4	6.6	4.2	330	
143	敲石・磨石	砂　岩	〃	8.6	4.4	3.8	250	
144	〃	結晶片岩	〃	10.9	5.1	3.8	325	
145	〃	砂　岩	〃	9.1	8.5	5.0	650	
146	〃	砂　岩	〃	9.4	5.7	2.5	245	
147	磨　石	砂　岩	〃	9.2	6.9	3.8	475	
148	〃	砂　岩	〃	8.8	6.8	3.7	370	
149	敲　石	輝緑石	〃	5.4	4.2	4.0	150	
150	打製石斧	輝緑石	〃	15.9	11.7	4.5	900	
151	円盤状石器	結晶片岩	〃	6.1	5.0	1.0	60	用途不明
152	磨　石	砂　岩	〃	5.5	5.0	3.5	190	
153	石　皿	砂　岩	〃	15.4	12.4	6.7	1470	

3　貝製品

上城遺跡から出土した貝製品にはイモ貝製貝玉，シャコ貝製貝皿，螺貝製貝斧である。そのほとんどが10～19号住居跡からの出土である。

貝玉

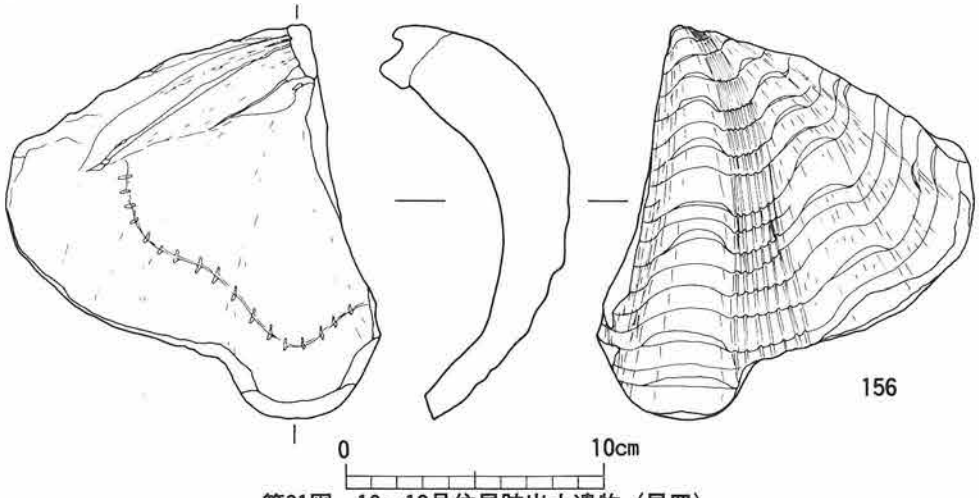
154，155はイモ貝製の貝玉である。10～19号住居跡の埋土からの出土である。イモ貝の殻頂部を利用し孔を穿ったものである。154が径1.35cm，孔径2㎜，重さ0.42gを，155が径1cm，孔径2㎜，重さ0.13gを測る。



第30図　10～19号住居跡出土遺物（貝玉）

貝皿

156はシャコ貝製の貝皿の破片である。10～19号の住居跡の埋土からの出土である。シャコ貝の腹縁部の突起部分を打ち欠いたものである。

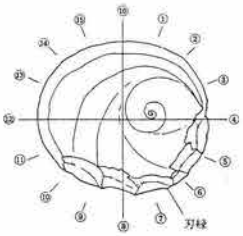


第31図　10～19号住居跡出土遺物（貝皿）

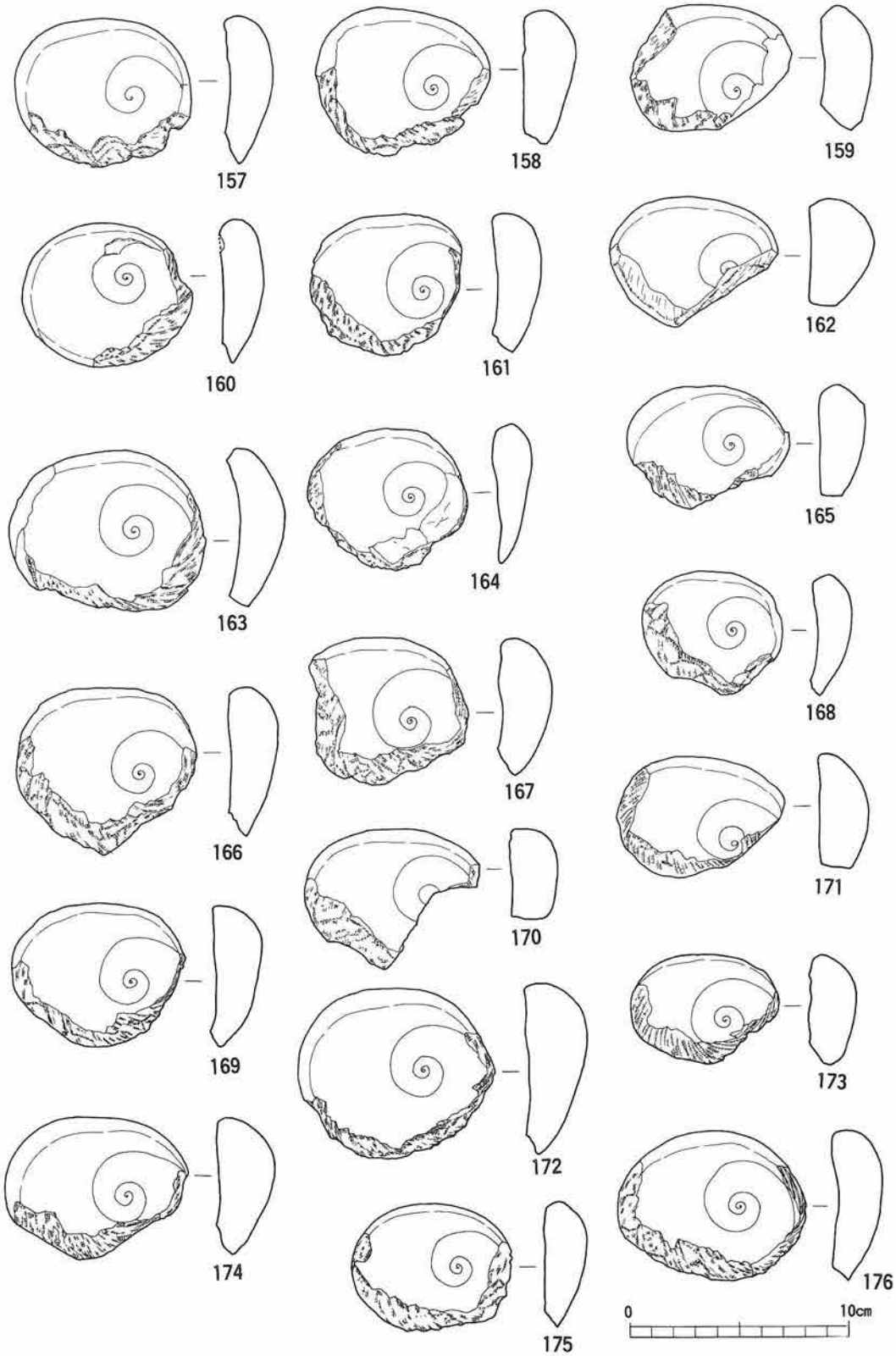
螺貝製貝斧

157～176が螺貝製貝斧である。157～175が10～19号の住居跡の埋土から，176が第14トレンチからの出土である。螺貝の蓋を利用したもので縁辺部に刃部状の剥離が見られるものである。

この名称については，これまで「貝斧」「貝刃」「ヤコウガイの蓋製貝斧」「ヤコウガイの蓋製スクレイパー」「螺貝製利器」などと称されて報告されていたもので，その機能的観点から名付けられている。刃部状となっているその形状については近年顕微鏡観察等により線状痕や磨滅などの使用痕が認められないことから敲打等の使用結果による痕跡であるのではないかという考えがある。



第32図　附刃模式図



第33図　住居跡出土遺物（螺貝製貝斧）

第3表　螺貝製貝斧計測表

貝斧計測表

No.	遺物No.	区	層	縦 cm	横 cm	厚 cm	重量 g	附刃の範囲	備　　考
157	595	6－7	3	6.9	8.1	2.0	120	5～11	
158	580	6－5	3	6.9	8.0	2.3	150	4～12	
159	621	6－8	3	5.8	7.1	2.2	125	3～14	
160	375	6－7	3	6.7	7.8	1.9	130	2～8	
161	367	6－8	3	6.5	6.8	2.0	115	3～12	
162	623	6－3	3	6.0	7.7	2.9	100	3～13	
163	597	6－7	3	7.2	9.0	2.0	200	3～11	
164	579	6－5	3	6.5	7.3	1.8	140	4～14	
165	362	6－8	3	5.7	7.5	2.1	90	4～11	
166	416	6－2	3	7.8	8.2	2.2	180	4～12	
167	471	6－3	3	6.8	7.1	2.5	140	3～14	
168	642	6－3	3	5.7	6.4	1.6	75	5～13	
169	530	6－5	3	6.7	8.0	2.3	135	3～12	風化が進む
170	599	6－7	3	6.5	8.0	2.2	130	3～12	
171		6－1	3	5.6	7.7	2.2	110	3～14	
172	598	6－7	3	7.9	9.0	2.9	225	3～11	
173		6－2	3	5.1	6.9	2.1	80	3～13	風化が進む
174	366	6－8	3	6.5	8.4	2.6	160	3～11	
175	455	6－2	3	5.9	7.3	1.9	110	3～13	
176		14－1	3	6.8	8.7	2.1	170	2～14	

4　骨格器

上城遺跡から出土した骨格器は，装飾品と利器とに大別される。装飾品では海獣骨製のかんざしや垂飾品，猪牙製の垂飾品，サメ歯製の垂飾品が，利器では猪骨製の骨針や骨錐等がある。

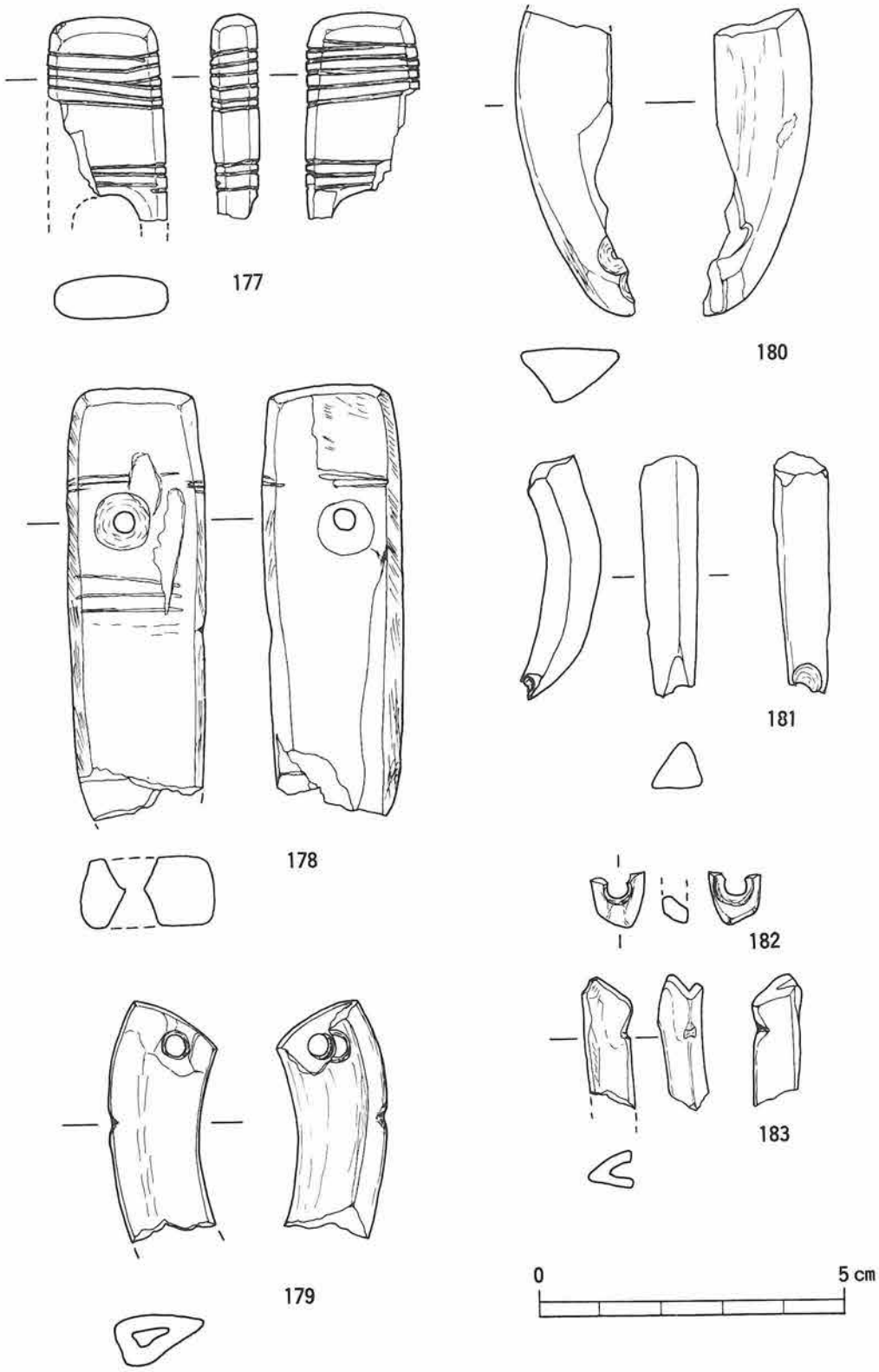
かんざし

177が海獣の肋骨製のかんざしの頭部片である。10～19号住居跡の埋土中からの出土である。幅1.9cmの端部から3cmのところに径約1cmの孔をもち，上部に4条下部に3条の沈線を巡らしている。断面形は石鹸状を呈する。残存長3.34cm，厚さ0.7cm，重さ4gを測る。

垂飾品

178は海獣の肋骨製の垂飾品の破片である。10～19号住居跡の埋土中からの出土である。幅2.3cmの端部から1.7cmのところに径約3mmの孔を両面から穿孔している。表面に剝離がみられるが孔の上部に2条，下部に3条の沈線を巡らしている。残存長7.04cm，長さ1.20cm，重さ19.48gを測る。

179～182は猪牙製の垂飾品である。10～19号住居跡の埋土中からの出土である。179は猪の犬歯の基部に孔を両面に穿孔したものの破片である。裏面は一部破損しているが，表面の孔の上部には紐ずれ痕が観察される。180は猪の犬歯の先端部に孔を2個穿孔したものの破片である。破損のため不明であるが，穿孔は両側から行ったものと考えられる。181も180同様のもの

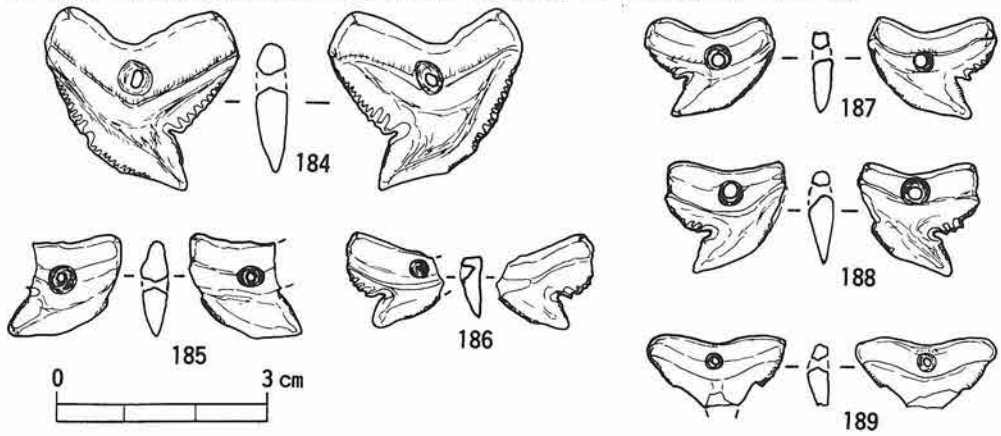


第34図　10～19号住居跡出土骨格器（装飾品－１）

であるが，穿孔の方向が異なっている。181は180と同じタイプのものの小破片である。183は猪牙の犬歯を半裁して端部近くに抉りを入れたものの破片である。

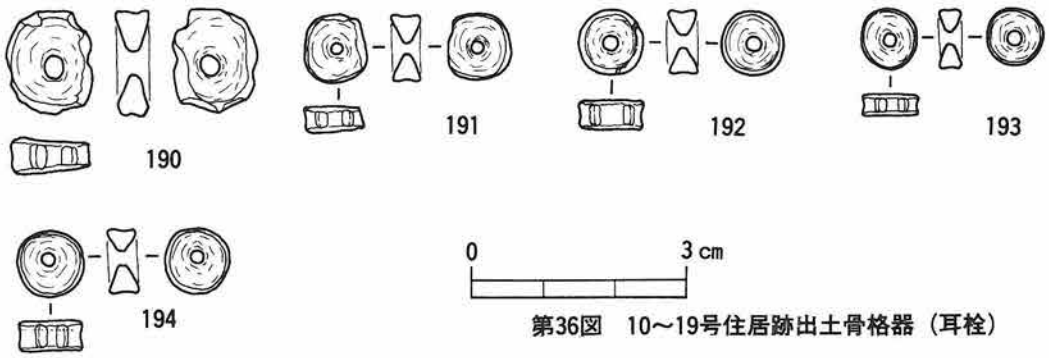
184～189はサメ歯製の垂飾品である。すべて10～19号の住居跡の埋土中からの出土である。184～188は奥，189は門歯に近い部分の歯でつくられたものである。

それぞれ歯根骨に近い歯骨側，製品の中央部に孔を両面から穿ったものであるが，186では片方からのみで完全に穿ってはいない。184はやや大型のものである。189は先端部が欠落している。裏面の基段部は研磨調整されており，端部は緩やかな弧状となっている。



第35図　10～19号住居跡出土骨格器（装飾品－２）

190～194はサメ（メジロザメか？）の椎骨製の耳栓である。すべて10～19号の住居跡の埋土中からの出土である。径1.5cm前後のやや小型のものが多い。



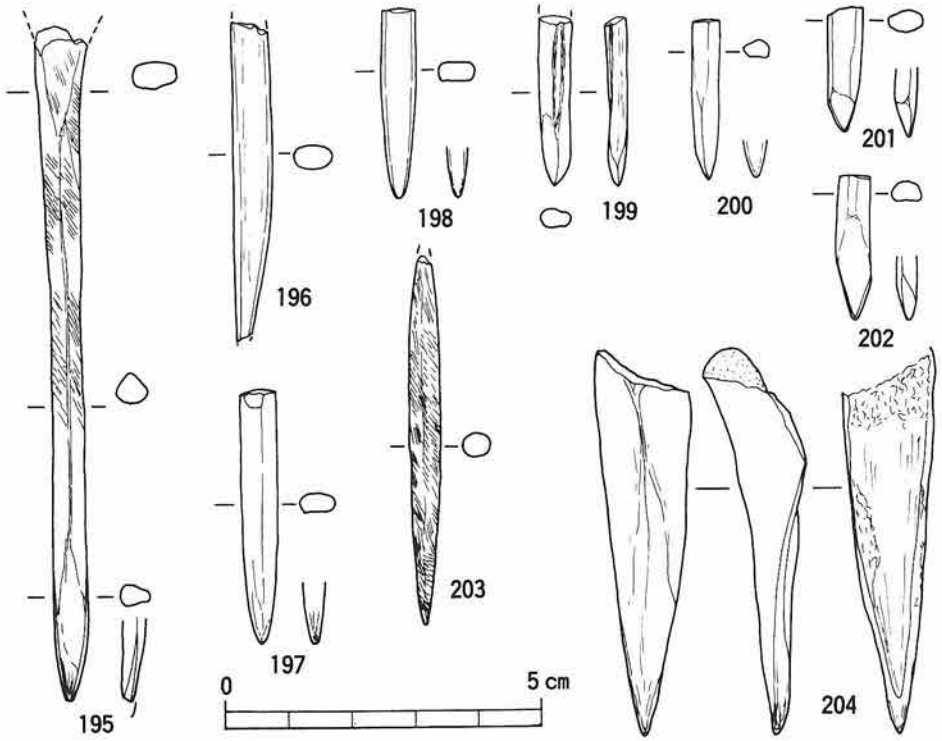
第36図　10～19号住居跡出土骨格器（耳栓）

骨製利器

195～204は猪腓骨製の骨針である。すべて10～19号の住居跡の埋土中からの出土である。195は近位端の一部を破損してはいるものの，ほぼ完形に近いものである。遠位部を加工し，刃先はやや鈍角的であり，その断面の形状はスキーの先端部状となっている。上部には加工痕が顕著に見られる。残存長10,705cm，重さ２.83ｇを測る。196は遠位部を加工するもので，刃先部分が破損しているが，片歯状に加工されている。残存長5.065cmを測る。197も遠位部を加工

するもので，刃先は円錐状となっている。残存長5.67cmを測る。198～202はいずれも先端部の破片である。刃先は198が円錐状を，199，200が両刃状を，201，202では面取りが行われている。203は両端部を加工しているものであり，ヤス状のものと考えられるものである。軸断面は円形を呈している。全体に研磨痕が顕著にみられる。残存長5.77cmを測る。

204は猪脛骨の近位部を利用した骨錐である。脛骨の遠位部を斜位にカットし，端部を鋭利に加工したものである。先端部に研磨痕が観察される。長さ6.1cmを測る。



第37図　10～19号住居跡出土骨格器（利器－1）

第4表　骨格器計測表－1

No.	遺物No.	器　種	区	層	長さ　cm	幅　cm	厚さ　cm	重量　g	材　質	備　考
177		かんざし	6－2	3	3.345	1.875	0.7	4.0	海獣肋骨？	
178	508	垂飾品	6－7	3	7.04	2.285	1.20	19.48	〃	
179		〃	12－1	3	4.0	1.50	0.4	4.28	猪牙・犬歯(L)	♂
180	121	〃	6－4	3	5.02	1.60	0.795	5.98	〃　(L)	老　♂
181		〃	6－4	3	4.0	0.9	0.77	2.65	〃　(R)	若　♂
182		〃	6－2	3	0.9	0.9	0.4	0.17	〃	
183	1	〃	6－2	3	2.2	8.2	0.65	0.77	〃　(L)	♂
184		〃	6－7	3	2.6	2.745	0.485	2.44	サメ歯	
185		〃	6－1	3	1.5	1.6	0.35	0.60	〃	
186		〃	6－1	3	1.37	1.35	0.40	0.38	〃	
187		〃	6－4	3	1.4	1.82	0.380	0.62	〃	

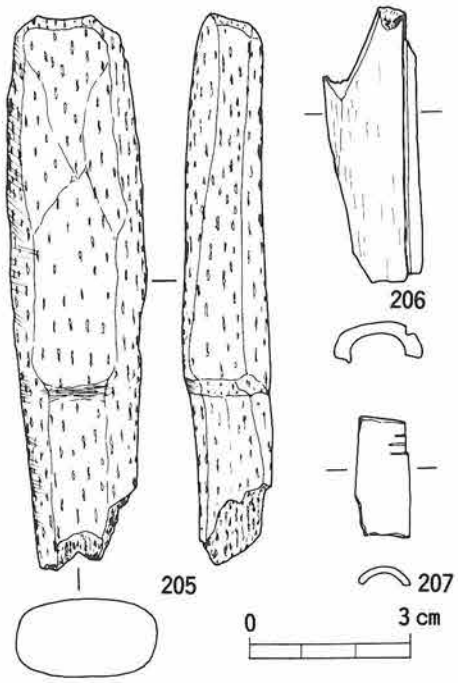
その他

205はクジラの肋骨製の利器で，10～19号の住居跡の埋土から出土したものである。表面に段部をつくりだしている側面に加工の際の擦痕を残す。アワビ起こし様の用途が考えられる。長さ14.7cm，最大幅3.7cm重さ23.3gを測る。

206，207は利器ではないが，加工痕の観察されるものである。10～19号の住居跡の埋土から出土した。

206は猪大腿骨を縦位に半裁したもので，縦位に刻線を有するものである。さらに切断する途中のものかは不明である。

207は猪腓骨を約¼に縦位にカットしたもので，表面に横位の3条の刻線を有するものである。



第38図　10～19号住居跡出土骨格器（利器－2）

第5表　骨格器計測表－2

No.	遺物No.	器　種	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	材　質	備　考
188		〃	6－1	3	1.61	1.71	0.33	0.62	〃	
189		〃	6－2	3	1.045	1.945	0.31	0.45	〃	
190		耳　栓	6－1	3	1.47	1.95	0.52	0.4	サメ椎骨	
191		〃	6－3	3	1.0	0.885	0.39	0.14	〃	
192		〃	6－3	3	0.90	0.80	0.32	0.22	〃	
193		〃	6－3	3	0.78	0.80	0.32	0.13	〃	
194		〃	6－6	3	0.90	0.89	0.43	0.22	〃	
195	294	骨　針	6－4	3	10.705	0.70	0.40	2.83	猪 腓 骨	
196		〃	6－5	3	5.065	0.635	0.380	1.3	〃	
197		〃	6－7	3	4.0	0.56	0.42	0.4	〃	
198	171	〃	6－5	3	3.0	0.545	0.32	0.4	〃	
199		〃	6－7	3	2.670	0.5	0.32	0.4	〃	
200		〃	6－1	3	2.5	0.42	0.30	0.3	〃	
201		〃	6－6	3	2.015	0.575	0.415	0.25	〃	
202		〃	6－7	3	2.295	0.48	0.310	0.3	〃	
203	576	骨　錐	6－5	3	5.77	0.485	0.405	1.0	猪 腓 骨	
204		〃	6－1	3	6.1	1.40	1.10	3.4	猪 脛 骨	近位部
205	95	その他	6－7	2	10.35	2.525	1.56	23.3	クジラ？肋骨	
206		〃	6－3	3	5.145	1.715	0.2	3.7	猪大腿骨	加工途中？
207		〃	6－8	3	2.31	1.17	0.1	0.71	猪 腓 骨	

第4節　まとめ

上城遺跡においては，6～25トレンチを設定し，最大19基の住居跡を確認した。このうち6トレンチの10～19号住居跡について，遺跡の性格を把握するために発掘調査を実施し，他の住居跡については，上面を実測後埋めもどした。上面としたのは，検出面を若干掘り下げて，清掃した状況での実測であったので，検出面と区別するために上面とした。最初に検出した住居跡であったために着手した住居跡の調査が，結果的に切り合いの多い住居跡に手をつけることになってしまったが，成果は大きいものであった。住居跡としては，敷石住居跡（10号住居跡―Aタイプ）・中央に石組炉をもち砂層を床とし，明確な柱穴をもつ住居跡（11号住居跡―Bタイプ）・石で囲い焼土を埋土とした住居跡（16号住居跡・17号住居跡―Cタイプ）の3タイプの住居跡が検出された。Cタイプについては石囲いが，長方形のプランの15号住居跡に伴う可能性もあり，タイプとして分離される可能性もある。なお11号住居跡の石組遺構が住居跡にともなう炉跡として断定できるか，敷石住居が一般化できるかどうか，Cタイプの住居跡の規模が小さく住居跡として認定できるか，検討する課題も多い。しかしながら，ここでは住居跡として一括してあつかい，資料として提示したい。3号・4号・5号住居跡では，pitを検出した。いずれも径10～15㎝程度の，小さなものである。3号・4号住居跡では，焼土に伴うようにも考えられる。4・5号住居跡はpitが屋外にある。性格は今後の調査に期待したい。

遺物は土器・石器・骨格器・貝製品・獣骨・魚骨が出土した。土器については，奄美・沖縄地方で，宇宿上層式・宇佐浜式などに伴って出土していた細沈線を有軸羽状に施す土器が，完形の壺形土器として2個体出土し，器形が明確になった。深鉢形土器については，従来の分類に従えば54～59・67～68が宇宿上層式＝宇佐浜式に，72～89・101・103・104・106が仲原式にあたる。90～100・102・105・107～116の中には，凸帯文土器とされているもので，仲原式に入るものがある。60～66・69～71は，口縁形状からはカヤウチバンタ式に類似するが，平口縁・平底に該当しない。これも本遺跡から尖底・丸底しかでていない点から，宇佐浜式に入るものとしておく。石器は磨製石斧の破片が多く，転用したものがあった。石材については，搬入品であるか，ないかの検討を要す。骨格器は，海獣骨製のかんざし・垂飾品，猪牙・サメ歯製の垂飾品などの装飾品と，猪骨製の利器などが出土し，とくに177のかんざしと，178の垂飾品，205の利器は，注目される。鹿児島県伊仙町犬田布貝塚[1]・沖縄県与那城村伊計島仲原遺跡[2]・与那城村宮城島シヌグ堂遺跡[3]に類例を見る。貝製品については，螺貝製貝斧が多く出土した。貝殻の出土は，少なかった。獣骨については第6章で詳しいが，骨格器に猪牙，猪の腓骨・大腿骨，海獣骨を使用している。その他に，小動物の骨も見られたが，猪，ウミガメ類の骨が目立った。魚類は，獣骨に比べて量が多く，ブダイ科，ベラ科，フエフキダイ科，ハリセンボン科，ハタ科の魚骨が出土した。大きさは様々で，小さいものも多く含み，リーフ内の手近な所から捕獲したものと考えられる。

住居跡の時期については出土土器から判断できる。本遺跡で出土した土器と類似するものは，鹿児島県では笠利町宇宿貝塚[4]・伊仙町犬田布貝塚[1]・十島村タチバナ遺跡[5][6]・住用村サモト遺跡[7][8]・

喜界町ハンタ遺跡[10]・龍郷町手広遺跡[9]などで出土する宇宿上層式，沖縄県では国頭村宇佐浜貝塚[11]・与那城村伊計島仲原遺跡[2]・与那城村宮城島シヌグ堂遺跡[3]などで出土している宇佐浜式・仲原式がこれにあたる。細沈線の土器に関しては，このほかに鹿児島県伊仙町面縄第１貝塚[12]・沖縄県大原貝塚群[13]などでも出土している。細沈線の土器が喜念１式として扱われることもあり，喜念１式・宇宿上層式・宇佐浜式・仲原式土器などについて，若干検討したい。

鹿児島県における土器編年は，河口貞徳氏の研究によるところが大きい[14]。氏は，喜念１式について，「壺形土器と甕形土器とがあり，口縁部がわずかに外反し，頸部はしまり，胴部はやや張り，底部は壺形土器は丸底，甕形土器と平底である。口縁部は直口のもの，三角形の断面を呈するもの，カマボコ形に肥厚するものなどがある。口縁部には一条ないし三条の細いみみずばれ状の凸帯をめぐらし，縦位に凸帯をくわえたものもあり，いずれも凸帯にそって連点をほどこすのが特徴である。頸部から胴部にかけて，斜行文，綾杉文，羽状文などの沈刻線を不規則に施文するのも特徴となっている。胎土は粒子が細やかで砂などをまぜず，焼成は悪くてもろく，色調は黄色味ををおびて脆弱の感じがある。」[15]と型式設定し，時期は，喜念１式・宇宿上層式を弥生時代中期に位置づけている。

近年，南西諸島をフィールドにした，熊本大学の発掘調査が継続的に行われ貴重な資料を提供している。十島村タチバナ遺跡[5][6]では，住居跡内の土器の出土状況・共伴関係の詳細はわからないが，宇宿下層式（喜念式）と宇宿上層式，一湊式，黒川式，入佐式が出土した。以後の取り扱いでは出土量の大半を占める喜念１式・宇宿上層式[7][8]を黒川式と共伴するものとして，時期を縄文時代晩期として扱っている。住用村サモト遺跡では，出土土器を，Ⅰ類＝宇宿上層式・Ⅱ類＝カヤウチバンタ式・Ⅲ類＝カヤウチバンタ式・Ⅳ類＝面縄西洞式・Ⅴ類＝喜念１式・Ⅵ類＝その他とし，さらにⅤ類を細分して，「Ⅴａ式＝細い粘土紐を縦と横にはりつけ，その両側又はそのうえに文様を施すもので，刺突連点文を施すもの，綾杉状の沈線文を施すものの２種類がある。また凸帯の間を沈線で充塡したものも認められる。Ⅴｂ式＝細い粘土紐の凸帯とその両側の刺突連点文が沈線文に置き換えられたものである。Ⅴｃ式＝文様が頸部にのみ認められ，沈線が横方向かもしくは羽状文状に斜めに入れ違いながら施文される。」として，沈線を有軸羽状にするものをも，喜念１式に含めた。そして，まとめのなかで，「Ⅳ類以外は石組内の覆土より混在して出土しており，しかもひどく攪乱されていないことから，おおよそ同時期のものとして概括して大過ないであろう。……サモト(1)」とし，翌年の調査で，九州系の黒色磨研土器が出土したことから，縄文時代晩期と対応さしている。龍郷町手広遺跡[9]では，層位と，カーボン測定の両方から，面縄西洞式（外耳付き土器の出現，研磨技法，平底卓越）→喜念１式・宇宿上層式（条痕文土器，磨研土器，尖底の出現）→外耳付き土器（カヤウチバンタ類似土器）→磨研壺の出現（外耳・山形突起の盛行）→刻目凸帯付土器，板付式類似丹塗磨研壺（外耳・山形突起の盛行）→兼久式土器が明らかにされている。喜念１式・宇宿上層式を縄文時代晩期前半としている。喜界町ハンタ遺跡[10]においては，喜念１式・宇宿上層式を縄文時代晩期としている。このように熊本大学の一連の研究活動の中で，喜念１式・宇宿上層式は縄文

時代晩期として扱われている。

伊仙町犬田布貝塚[11]では，出土土器を分類して，Ⅰ類を面縄西洞系統で一時期下がるもの，Ⅱ類を文様構成においてより面縄西洞式の系統を色濃く残すもの，Ⅲ類を頸部の文様はより喜念1式に近いもので，形にも甕形土器と壺形土器とが見られるもの，Ⅳ類＝喜念1式・Ⅴ類＝宇宿上層a式・Ⅵ類＝その他とし，Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅲ類→Ⅳ類と時間的推移を述べている。これが河口貞徳氏の「犬田布式は面縄西洞式に類似するが，上部凸帯は口縁部と癒着したものもあらわれ，総じて細くなる。器形は深鉢形および甕形の平底である。つぎの喜念1式への漸移的様相が見られる。」という犬田布式の型式設定[15]につながる。細沈線羽状文の土器片はⅥ類にふくまれ，Ⅴ類・Ⅵ類については，時期の説明はなされていない。

与論島は距離的には沖縄県に近く，特に国頭村にカヤウチバンタ貝塚・宇佐浜貝塚などあり，型式名として使用されてきた重要な遺跡も多い。宇佐浜式は口縁部が肥厚し，肥厚部が断面三角形あるいは蒲鉾形を呈し，器形は壺形または深鉢形，尖底および丸底になるものである。沖縄県における，土器編年は，高宮廣衛氏の「沖縄諸島における新石器時代の編年(試案)」1978[16]を基礎として研究が進んでいる。新石器時代を大きく2分して編年し，縄文時代を前期，弥生時代を後期に対応させている。このなかで宇佐浜式は前Ⅴ期（九州縄文時代晩期相当）に位置付けられた。貝塚時代の時期区分については，従来文化内容から前期・中期・後期と区分してあり，報告書等で微妙な使い分けが見られる。伊平屋村久里原貝塚[17]は，多くの型式の土器が層位的に出土している。この中にカヤウチバンタ式・宇宿上層式・喜念1式も見られ，72トレンチⅡ層出土の型式不明土器として扱われている壺形土器は，口縁部の形状と細沈線の羽状の施文が，本遺跡の焼土出土のものと関連が深いものと考えられる。これらの編年的位置付けとしては，前Ⅴ期（九州縄文時代晩期相当）としている。シヌグ堂遺跡，宇佐浜遺跡でも沖縄の貝塚時代中期を代表するものとして，縄文時代晩期相当期として扱っている。さらに宇佐浜式に後続するものとして仲原式が提唱され，定着しつつあるが，これらの土器は本遺跡出土の土器群のなかにも多く見られる。

以上のように，細沈線の壺形土器と喜念1式との関係，喜念1式・宇宿上層式＝宇佐浜式を弥生時代中期相当期と，縄文時代晩期相当期とするふたつの見方の存在が問題点として指摘できる。細沈線の壺形土器は本遺跡ではじめて完形土器で出土した。口縁部の異なる土器に同種の施文が施されている。これは時期差と考えるより，壺形土器にかなりのバリエーションがあったとも考えられる。36・51は水差し形に復元できたが，水差し形土器の中での型式変化を表している。仲原遺跡出土の土器のなかで，特に水注土器として報告されている壺形土器は，51ときわめて類似している。本遺跡出土土器で上層と下層は必ずしも明確に分離できなかったが，壺形土器を手掛かりに，2時期に分離できる可能性がある。上層，下層を一応の目安としながら，住居跡の切り合いも検討して分離できた場合は，新しいほうは仲原式に，古いほうが宇佐浜式の時期かもう一段階古い時期にあたると考えられる。また，喜念1式は河口氏の型式設定に従うべきで，ここで明確になった細沈線の壺形土器については，他の形式との関係な

ど，資料の増加を待って，新しい型式として設定し直すことが望ましいと考える。時期については，いまのところは熊本大学，沖縄県の相当期に合理性があると考えられる。

これらを考慮して，本遺跡の10～19号住居跡は縄文時代晩期末～弥生時代の後期と考えて大過ないものと考える。

この時期の住居跡としては，前出の各遺跡に該当する遺跡が含まれている。笠利町宇宿貝塚において，1955年の調査で宇宿上層式の時期に，サンゴ礫で囲った一辺2.3mの方形の1号石組住居跡を検出し，1978年の調査では東西約3m南北2mの2号石組住居跡を検出した。住居跡埋土にサンゴ礫を多く含んでいて，本遺跡の検出状況と同じ様相を示すものと考えられる。知名町住吉貝塚[18]は1957年に調査され，宇宿上層式の時期の住居跡で，東側3分の1は自然のサンゴ礁面を調整して住居の壁とし，残り西側3分の2は礫をならべて石組みして仕上げている短辺約2m×長辺3mの住居跡である。西隅に矩形の炉をもつ。十島村タチバナ遺跡は1977，78，79に調査され，4～5mの円形竪穴住居跡8基，屋外炉跡9基を検出した。住用村サモト遺跡（1982・1983年調査）ではⅡ層で7基石組住居跡を検出した。「方位性があり，住居跡内に柱穴検出されず，いずれも3m以下，中に必ず火床があり，むしろ火床を石壁で囲んだ感じのものが目立った。上部構造は石組を大きく取り込むように構築されていた可能性を残す。外部にも柱穴なし。（一部略）」と報告されている。16～18号住居跡の状況にちかい。喜界町ハンタ遺跡（1986年調査）では，宇宿上層式の時期（縄文時代晩期相当期）の方形ないしは隅丸方形の住居跡などを検出した。プランは大きいものでも1片3mを越えるものはない。住居跡内に焼土がかなり大きな面積を占めて堆積しており，壁際にピットを有す。サンゴ礫による石囲いは見られない。宇佐浜遺跡では，石組み遺構8基を検出した。長径が2m内外と小規模で，炉跡は検出されなかった。与那城村伊計島仲原遺跡（1980年調査）では，11基の石組みの竪穴住居跡を検出した。土器のほかに板状片刃石斧などの石器，サメ歯製垂飾品，骨針も，本遺跡出土遺物と共通し，同時期の住居跡群として考えられる。石囲い住居跡の規模やプラン，検出状況などが，本遺跡1号・2号・4号・5号・15号住居跡に類似している。1984年に調査された与那城村宮城村シヌグ堂遺跡では，壁面に琉球石灰岩の列石をもつ住居跡，床面に拳大の石灰岩礫を敷き詰めた住居跡を検出した。竪穴住居跡は，3mを越えない規模の隅丸方形のプランをもち，住居跡内に炉跡をもつものが多い。礫床住居跡と竪穴住居跡の関係は，礫床住居跡の方が竪穴住居跡より新しい住居形態とされている。シヌグ堂遺跡も仲原遺跡と同様に，本遺跡と様相を同じくする遺物を出土し，住居跡の埋土状況・規模・プランなども共通する。敷石住居跡については，具志川市田場小学校南方遺跡[19]で宇佐浜式期の敷石遺構が，具志川市地荒原遺跡[20]でも，敷石遺構が検出されている。

この時期の住居跡については，石組み住居跡（石囲い住居跡）の規模は小規模で，隅丸方形のプランをなし，炉跡を屋内にもつものが多く，本遺跡のCタイプの住居跡もこれに該当するものと考えることができる。Bタイプの住居跡の敷石住居跡は，沖縄県に類例を見る。Aタイプの住居跡については，今後の課題としておきたい。竪穴住居跡の検出状況・埋土状況，敷石

住居跡の存在，出土遺物など，沖縄方面との関係がより深いと考えられる。これは当然ながら距離的なものが影響しているもので，住居跡・住居群については，沖縄・奄美と総合的な検討をあくまでも前提しなければならない。

こうした様々の生活遺物の出土は，住居跡の発掘ならではのもので，与論島のみならず南西諸島全体の，この時期の生活文化を総合的に把握していくうえで貴重な資料であり，古環境の復元にも，また貴重な資料となりうる。

参考文献

1）1984　吉永正史・宮田英二　「犬田布貝塚」　伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)　伊仙町教育委員会

2）1981　当真嗣一・上原　静　「伊計島の遺跡」　―神山・仲原遺跡確認調査概報　沖縄県教育委員会

3）1985　金武正紀・比嘉春美　「シヌグ堂遺跡」　沖縄県文化財調査報告書　第67集　沖縄県教育委員会

4）1979　河口貞徳・出口　浩・本田道輝　「宇宿貝塚」　笠利町教育委員会

5）1979　熊本大学考古学研究室　「タチバナ遺跡」　研究室活動報告 4

6）1980　熊本大学考古学研究室　「タチバナ遺跡(2)」　研究室活動報告 7

7）1983　熊本大学考古学研究室・住用村教育委員会　「サモト遺跡(1)」　住用村教育委員会

8）1984　〃　「サモト遺跡(2)」　住用村教育委員会

9）1986　熊本大学文学部考古学研究室　「手広遺跡」　研究活動報告20

10）1987　熊本大学考古学研究室・喜界町教育委員会　「喜界町文化財調査報告　ハンタ遺跡」　喜界町教育委員会

11）1989　岸本義彦・大城秀子　「宇佐浜遺跡」　沖縄県文化財調査報告書　第93集　沖縄県教育委員会

12）1983　牛ノ濵修・堂込秀人　「面縄第１・２貝塚」　伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

13）1982　沖縄県教育委員会　「掘り出された沖縄の歴史」

14）1974　河口貞徳　「奄美における土器文化の編年について」　鹿児島考古第９号

15）1988　河口貞徳　「日本の古代遺跡　38　鹿児島」　保育社

16）1978　高宮廣衛　「沖縄諸島における新石器時代の編年（試案）」　『南島考古』第６号

17）1981　岸本義彦他　「伊平屋村文化財調査報告書第１集　久里原貝塚」　伊平屋村教育委員会

18）1959　河口貞徳　「沖永良部島住吉貝塚の調査」　九学会連合奄美大島共同調査委員会　「奄美大島の先史時代」

19）1984　天願武男他　「田場小学校南方遺跡」　沖縄県具志川市教育委員会

20）1986　大城　慧他　「地荒原遺跡」　沖縄県文化財調査報告書　第75集　沖縄県教育委員会

第6章　与論町上城遺跡出土の自然遺物とくに動物遺体について

西中川　　駿・佐　藤　克　己

（鹿児島大学　獣医解剖学教室）

1．はじめに

遺跡から出土する自然遺物は，当時の人々の生業活動，即ち狩猟，漁撈，採集などを知る上に[5]，また，当時のその地域の動物相を知る上にも貴重な資料となっている。

南西諸島の自然遺物の出土は，これまで21カ所の遺跡から報告され[1-4, 6]その出土物も哺乳類，鳥類，爬虫類，魚類，甲殻類，貝類など多種にわたっている。

今回，調査依頼を受けた上城遺跡は，大島郡与論町東区真正地区にあり，土地改良事業のため，平成元年5月15日から6月10日まで同町教育委員会が県教育庁文化課の吉永，堂込氏の指導の下に発掘した縄文時代晩期の住居跡の検出された遺跡である。自然遺物は，主に第6トレンチ包含層から出土しており，ここでは動物遺体について，その概要を報告する。なお，本遺跡からは，魚骨の出土が多いが，種の分類については，専門化に同定をお願いしたい。

2．出土状況と出土骨量

動物別，区画別出土量は，表1に示した。第6トレンチからは縄文晩期の住居跡，9基が確認され，動物遺体は主に第3層や住居埋土層から出土している。出土総重量は10006.9gで，それらは哺乳類1556.3g，鳥類0.9g，爬虫類3135.8g，魚類5296.3gであり，魚類が全体の52.9％を占めている。区画，層別では6－3－埋土が1092.6gで最も多く，次いで6－1区の832.8gである。

3．出土動物種と出土骨の概要

この項では主に哺乳類について詳述し，その他の動物についても少し記述することにする。哺乳類はイノシシ，イヌ，ネズミ，クジラ，ジュゴンの5目5種である。それらの出土骨片数は，表1の下段の（　）に示した。

イノシシ（Sus scrofa LINNAEUS　P1．Iの1～32参照）

イノシシはほぼ全身の骨格が出土し，その骨格別出土片数は表2に示した。頭蓋片および歯が94，胴骨78，前肢骨112および後肢骨97であり，完全な形で残っているものは，肢端を除いてはない。四肢骨では，上腕骨26（左11，右15個，以下同じ），大腿骨23（10，13）個などが多く，これらから個体数を推定すると，少なくとも10個体以上のものである。完形骨が少ないために，最大長などを計算することは出来ないが，上腕骨最小幅は，12.76±0.64（n＝7）であり，この数値はニホンイノシシよりはるかに小さく，現存のリュウキュウイノシシとほぼ同じ大きさである。また，若齢のものもあるが，2～5歳のものが大半である。

イヌ（Canis familiaris LINNAEUS　P1．Iの33～36参照）

イヌの出土は少なく，左側の上顎犬歯2，仔犬の下顎第一後臼歯（左），第三頸椎の4点の

出土である。上顎犬歯はほぼ完全であり（Ｐ１．Ｉの33），全歯高33.6㎜，歯冠長×幅は8.7×5.4㎜で，現生の柴犬より少し大きい。下顎第一後臼歯は幼犬のものと思われ，歯冠長×幅は10.8×4.1㎜である。

ネズミ類（Muridae sp.　Ｐ１．Ｉの37，38参照）

上，下顎切歯３本のみの出土で，ほぼ完全な右上顎切歯は，長さ13.8㎜，中央の幅×径は2.9×1.1㎜であり，ケナガネズミと同じ大きさである。

クジラ類（Cetacea sp.　Ｐ１．Ｉの39，40参照）

椎骨や椎骨板などが出土しているが，種は不明である。

ジュゴン（Dugonidae sp.　Ｐ１．Ｉの41，42参照）

２個の助骨がみられるが，大きい助骨は加工されており，穴があけられている（Ｐ1．Ｉの41）。

２）鳥類（Ｐ１．Ｉの43，44参照）

小型の鳥類の右尺骨２個の出土で，マガモ大のもので，尺骨近位端の幅×径は7.8×6.9㎜である。

３）爬虫類（Ｐ１．Ｉの45～48参照）

ウミガメの頭蓋，背，腹甲，上腕骨，前鳥口骨，尺骨，指骨など3135.8ｇの出土で，カメの多いのも本遺跡の特徴である。

４）魚類（Ｐ１．Ⅱの１～17参照）

魚類は本遺跡では5296.3ｇと最も多く，その骨片は膨大なものである。サメの椎骨，ガダイなどのタイ類やハタ類，ベラ類，ハリセンボンの前上顎骨，歯骨，上・下咽頭骨，鰓蓋骨，椎骨など沢山の骨がみられる。専門家の詳細な分析を期待したい。

なお，哺乳類のものであるが細骨片のため骨の種類のわからないものが，17.6ｇある。

４．考　察

与論町からの自然遺物の出土は初めてであり，南西諸島の最南端の資料として貴重なものである。特に魚類やウミガメなどが多く，この地域に住んでいた人々が魚撈や採集を中心とした生業活動を行っていたことが示唆される。一方，狩猟獣としては，陸上ではイノシシのみであるが，これは奄美地方の遺跡の特徴で，また，本土や種子島の遺跡からはシカの出土が多いが[6,7]，本遺跡を含む奄美諸島の遺跡からは，これまでシカの出土は皆無である[1-4,6]。現在も南西諸島にはシカは生息していないことから，当時もシカは生息していなかったことが考えられる。イノシシの出土骨にみられる形質は，ホンドイノシシよりもむしろ現生のリュウキュウイノシシに似ており，縄文晩期にすでに小型のイノシシが生息していたことが示唆される。

縄文時代のイヌは，すでに狩猟犬として飼われていたといわれ[5]，全国各地で埋葬例が報告されている。出土骨の大きさは，日本犬の柴イヌより少し大きく，徳之島の犬田布貝塚[1]出土のものとよく似ている。

本遺跡出土の珍しい動物としてジュゴンが検出されたが，これまであやまる第２貝塚[2]から

表１．　上城遺跡の動物別および区画別出土骨量　（g）

トレンチ	区	層	哺乳類 イノシシ	哺乳類 イヌ	哺乳類 ネズミ	哺乳類 クジラ	哺乳類 ジュゴン	鳥類	爬虫類（カメ）	魚類	細骨片	区画別出土量
1T		排土							4			4.0
2	3								8			8.0
3T	北	表					20(1)					20.0
6	1		30.5(25)						160	641	1.3	832.8
		3	142.2(17)						17.2	11.2	0.4	171.0
		住埋土	16.0(8)						148	409.0		573.0
	2									166		166.0
		3	5.3(1)						93		8.4	106.7
		住埋土	19.6(14)						188	354		561.6
	3		15.4(7)						30	220		265.4
		3	96.8(4)						43			139.8
		住埋土	53.9(44)					0.4(1)	307	731.3		1092.6
	4	3	12.9(1)							8		20.9
		住埋土	23.3(13)						87	386		496.3
	5		10.8(2)						73			83.8
		3	21.3(4)				15(1)					36.3
		住埋土								120		120.0
	6		6.7(6)						130	5		141.7
		3	42.1(2)						33			75.1
		住埋土	2.8(5)							180		182.8
	7	3	159.4(17)			40(1)			186.8	3.4	2.3	391.9
		住埋土	48.9(20)	1.3(1)	0.3(1)				155	573.1		781.1
	8	3	87.2(2)						41.5	10		138.7
6T	1	3	82.1(15)						46.4	5.3		133.8
		住埋土	24.7(22)						170	142		336.7
	2		2.1(1)							20		22.1
		3	23.2(4)			84(1)			14		0.8	122.0
	3	3	7.4(2)									7.4
	4	住埋土								183		183.0
	5			2.3(1)					115	5		122.3
		3	69.3(7)							8		77.3
		住埋土	36.8(28)	0.1(1)	0.1(1)					2.7		39.6
	6	3	52.8(7)						41.4			94.2
		住埋土	4.6(3)						100	348		452.6
	7	3							52	2		54.0
		住埋土	21.3(11)						185	9		215.3
	8	3	19.3(1)									19.3
		住埋土	34.9(25)		0.1(1)			0.5(1)	204	131	0.4	370.9
	抗	2	1.5(1)						8			9.5
	東抗	2	105.6(30)						202.5	263	1.5	572.6
13T	2									10		10.0
14T		H								12		12.0
15T		H	3.3(1)							10		13.3
21T		H							28			28.0
28T		3	5.0(1)									5.0
H	1	2	103.3(30)	1.0(2)					265	327.3		696.6
動物別出土量			1392.3 (381)	4.6 (4)	0.4 (3)	124.0 (2)	35.0 (2)	0.9 (2)	3135.8	5296.3	17.6	10006.9

（　）は骨片数を示す。

表2．　上城遺跡のイノシシの骨格別出土骨片数

骨名	頭蓋			胴骨							前肢骨							後肢骨							動物骨別出土骨片数
動物種	頭蓋骨	下顎骨	舌骨	類椎	胸椎	腰椎	仙椎	尾椎	肋骨	胸骨	鎖骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手根骨	中手骨	指骨	寛骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	腓骨	足根骨	中足根骨	趾骨	
イノシシ L	5	13	30	11	4	5				26	8	11	5	7	2	9	9	8	10		15	2	10	5	2		381
イノシシ R	5	9	32							32	5	15	10	7	0	13	11	6	13		6	1	5	11	3		
骨格別出土骨片数	94(24.7%)			78(20.5%)							112(29.4%)							97(25.4%)								

も出土しており，奄美を北限として生息しているジュゴンも食料とされたのであろう。

以上，上城遺跡を遺した人々は，春から夏には海辺へ出て，魚，貝類を採集し，冬場にはイノシシ猟を行い，食膳を豊かにしていたことが，自然遺物から想像される。

5．まとめ

与論町上城遺跡出土の縄文晩期の人工遺物と共伴した動物遺体について調査した。

1）自然遺物の総重量は，10006.9g（貝類を除く）で，それらは哺乳類1556.3g，鳥類0.9g，爬虫類3135.9g，魚類5296.3gであり，魚類が全体の52.9%を占める。

2）哺乳類はイノシシ，イヌ，ネズミ，クジラ，ジュゴンの5目5種で，鳥類はマガモ，爬虫類はウミガメ，魚類はブダイ，ベラ，ハタ，ハリセンボン，サメなどである。

参考文献

1．伊仙町教育委員会：犬田布貝塚p74－81，（1984）

2．笠利町教育委員会：あやまる第2貝塚，p62－65（1984）

3．　〃　〃　：サウチ遺跡，p65－66（1978）

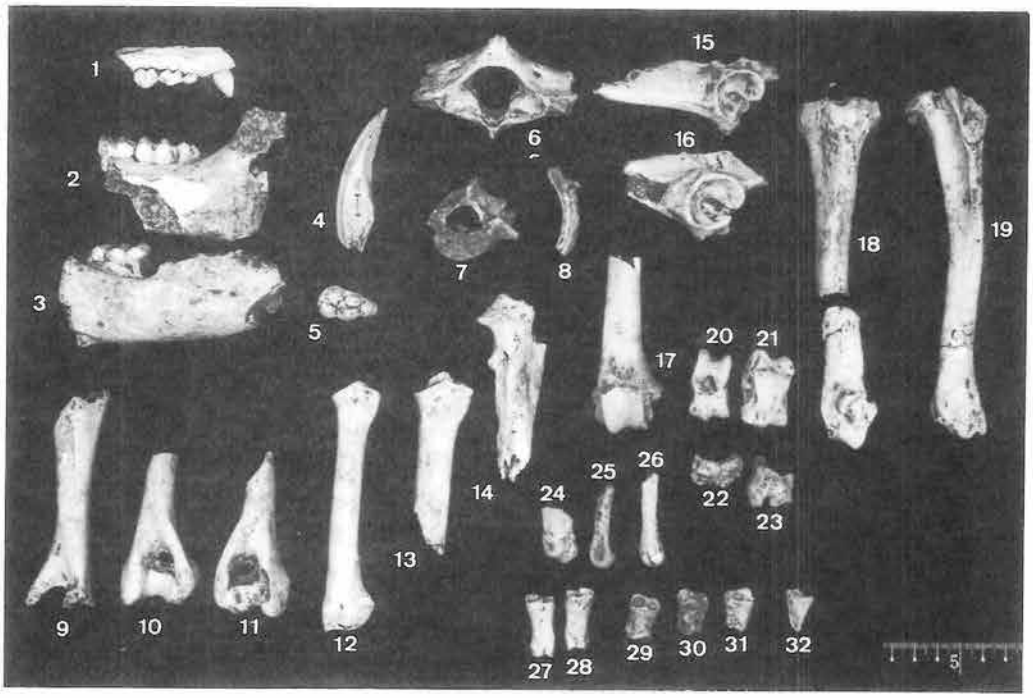
4．　〃　〃　：宇宿貝塚p95－96，205－206（1979）

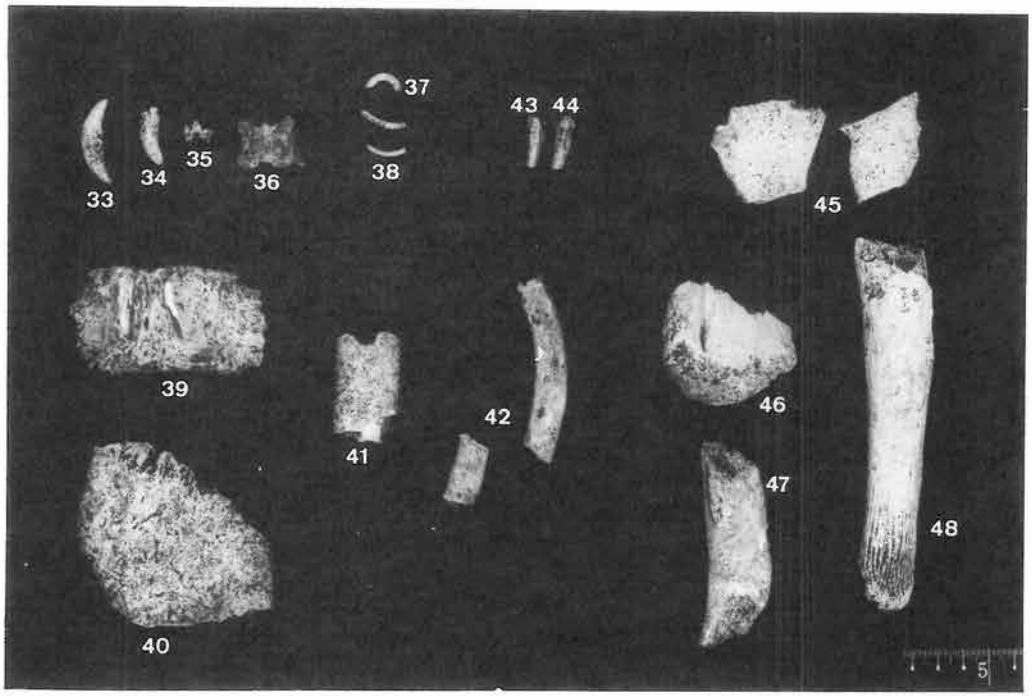
5．金子浩昌：縄文時代の狩猟，漁撈，歴史公論，2，67－71（1979）

6．西中川駿：薩南および南西諸島の縄文，弥生遺跡出土の自然遺物－とくに出土哺乳動物骨について－，鹿大考古，2，102－112（1984）

7．西中川駿他：古代遺跡出土の動物骨に関する研究Ⅳ．鹿児島県麦之浦貝塚出土骨の概要，鹿大農学術報告，37，105－113（1987）

Plate I


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
5


33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
5

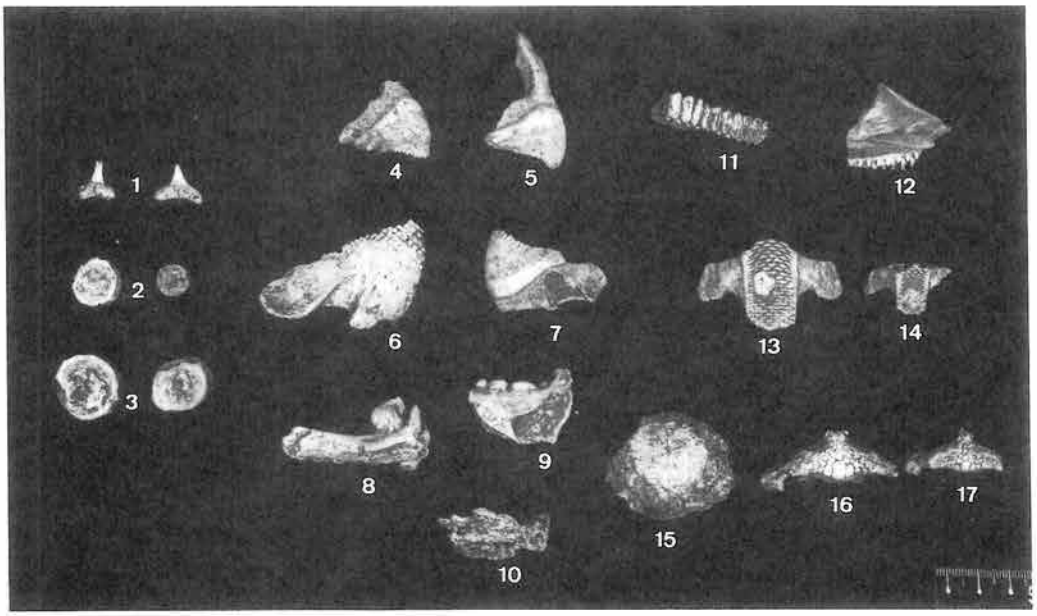


Plate I の説明

1～32：イノシシ　33－36：イヌ　37，38：ネズミ　39，40：クジラ　41，42：ジュゴン

43，44：鳥類（マガモ）　45－48：ウミガメ

1．左上顎骨　2．右下顎骨　3．右下顎骨　4．左下顎犬歯　5．右下顎第三後臼歯

6．第一頸椎　7．腰椎　8．右助骨　9．右上腕骨　10．右上腕骨　11．左上腕骨

12．左橈骨　13．左橈骨　14．左尺骨　15．左寛骨　16．左寛骨　17．左大腿骨

18．左脛骨　19．右脛骨　20．右距骨　21．左距骨　22．左第三足根骨　23．左第四足根骨

24．右第三中手骨　25．右第五中手骨　26．左第五中手骨　27．左第三指基節骨

28．左第四指基節骨　29．右第三指中節骨　30．左第三指中節骨　31．右第四趾中節骨

32．左第三趾末節骨　33．左上顎犬歯　34．右上顎犬歯　35．右下顎第一後臼歯

36．第三頸椎　37．右上顎切歯　38．右下顎切歯　39．椎骨　40．椎骨板　41．42．助骨

45．頭蓋骨　46．左上腕骨　47．尺骨　48．前烏口骨

Plate II の説明

1～3：サメ　4～7，11～14：ブダイ　8，10：ハタ科　9：クロダイ

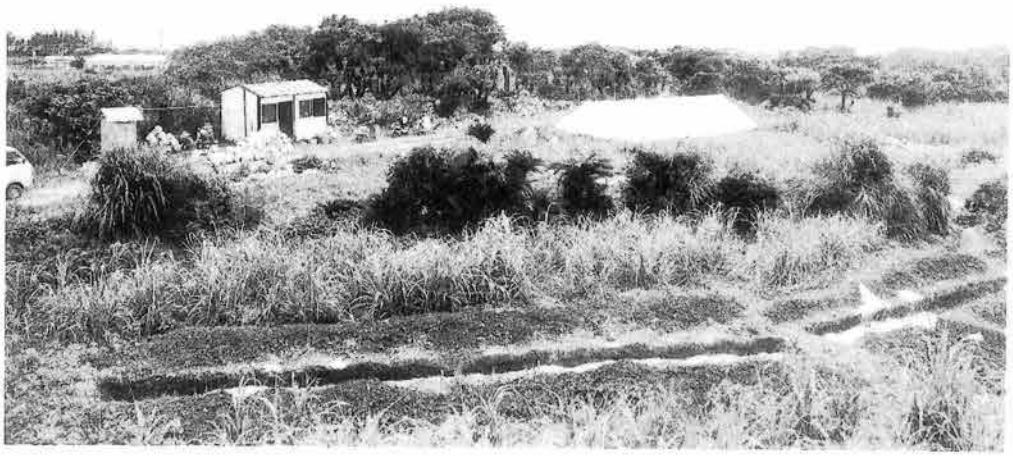
15：ハリセンボン　16，17：ベラ科

1．歯　2，3．椎骨　4，5．前上顎骨　6，7．歯骨　11，12．上咽頭骨

13，14．下咽頭骨　15．上顎骨　16，17．下咽頭骨

図　　版

①遺跡遠景



②遺跡全景

図版 2

③遺跡全景

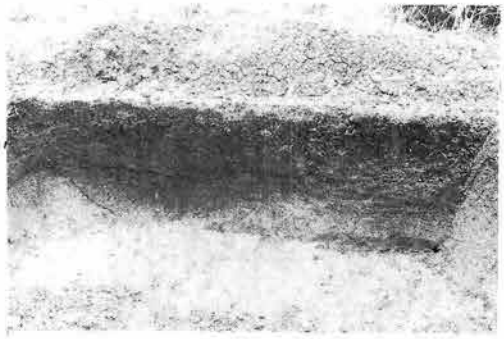
④伐採作業

⑤発掘作業（3トレンチ）

⑥発掘作業（6トレンチ）

⑦発掘作業（6トレンチ～拡張、住居跡）

⑧遺跡見学会



⑨第5トレンチ土層断面

⑩上城跡遠景（東より）

⑪本丸登り口

⑫本丸登り口

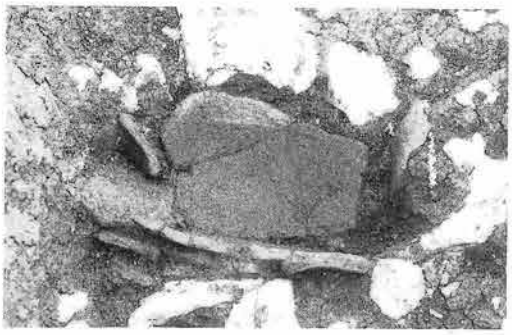
⑬石積み状況

⑭本丸登り口

⑮炉跡状遺構

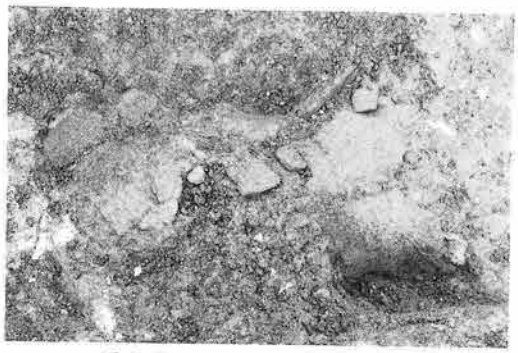
⑯ Pit 堆積状況

図版 4



⑰土器出土状況（1号住居跡　No. 8）

⑱土器出土状況（No. 51）



⑲土器出土状況（No. 36）

⑳土器出土状況（No. 21）

㉑骨格器出土状況（No. 195）

㉒骨格器土状況（No. 203）

㉕猪下顎骨出土状況

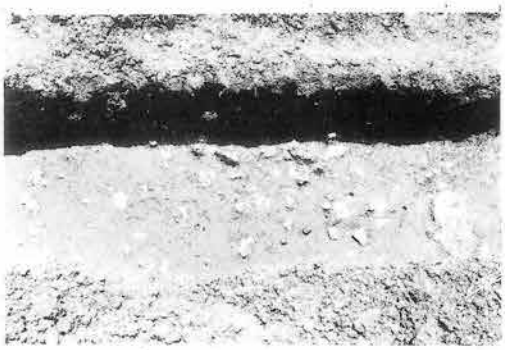
㉓石器出土状況（No. 132）

㉔石器出土状況（No. 133）

㉖ 1 号住居跡上面

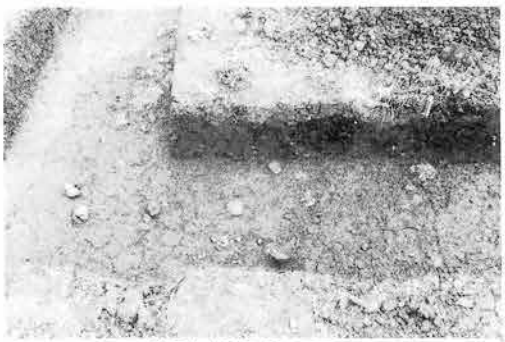
㉗ 2 号住居跡上面

㉘ 3 号住居跡上面



㉙ 4 号住居跡上面

㉚ 5 号住居跡上面

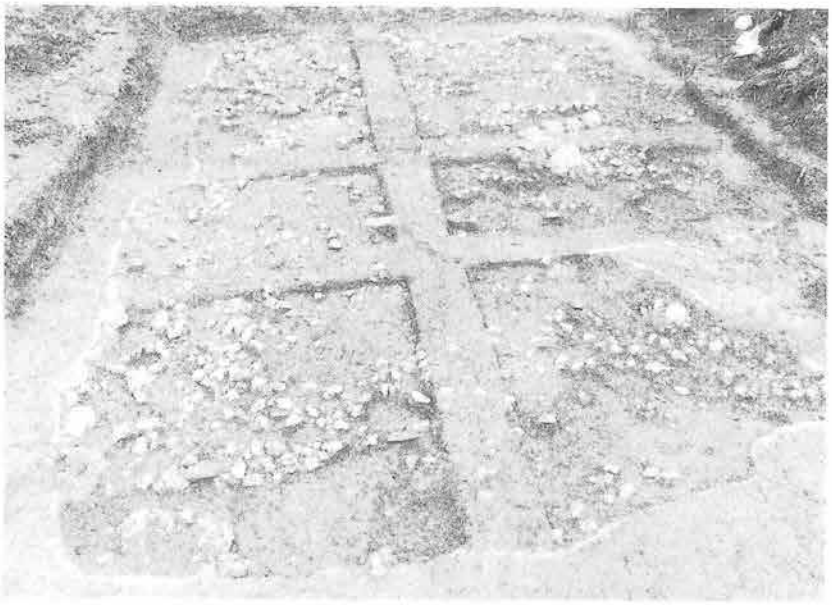


㉛ 7 号住居跡上面

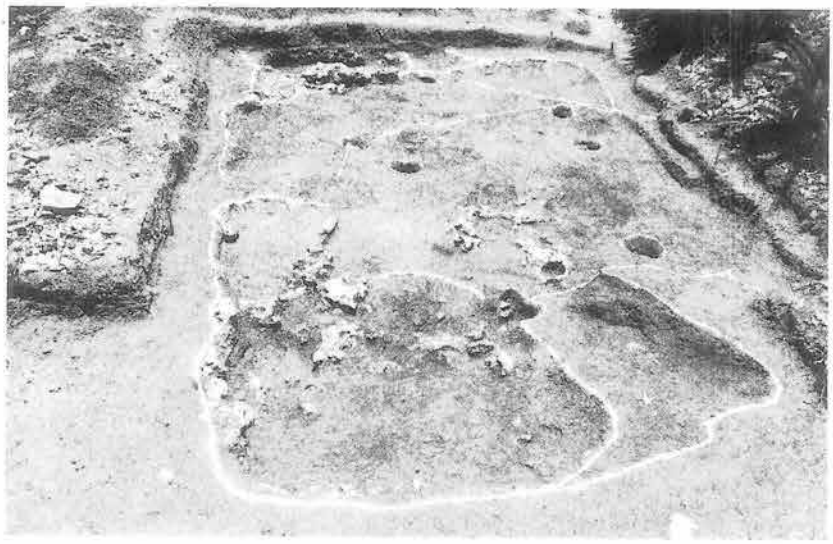
㉜ 8 号住居跡上面

㉝ 9 号住居跡上面

図版 6



㉞上面



㉟完掘状況

㊱

㊲

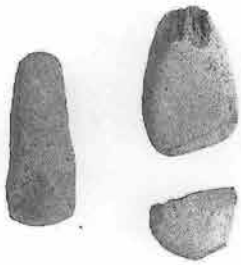
㊱、㊲石組み

10～19号住居跡検出状況

㊳上城跡出土遺物（1～4）

㊵上城遺跡出土遺物（No. 8）

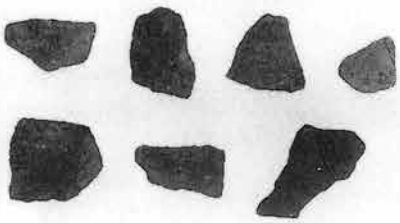
㊴出土土器（5～7、9）



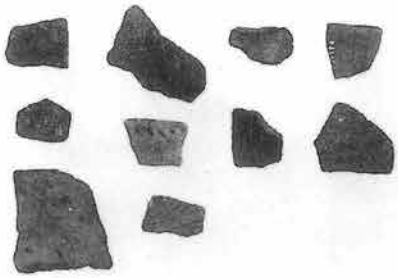
㊶出土土器（10～12）

㊷出土土器（13～22）

㊸No. 21

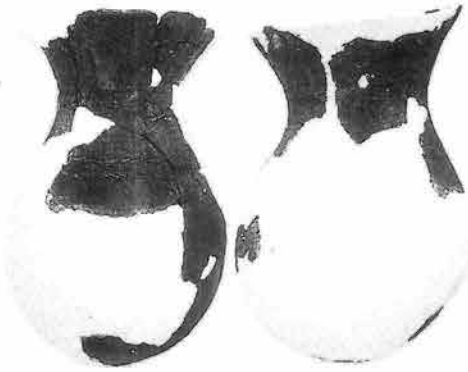


㊹出土土器（23～29）



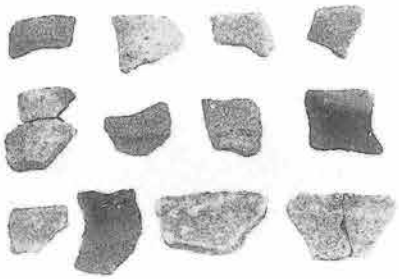
㊺出土土器（30～35、37～40）

図版 8

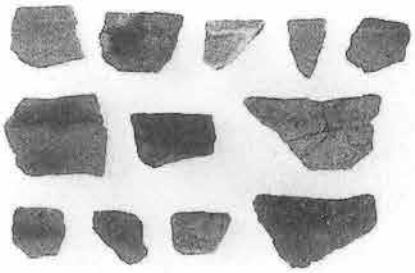


㊻No. 36

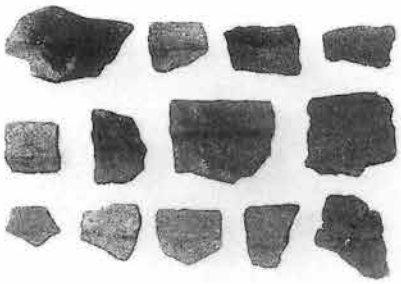
㊼No. 51



㊽出土土器（41～53）

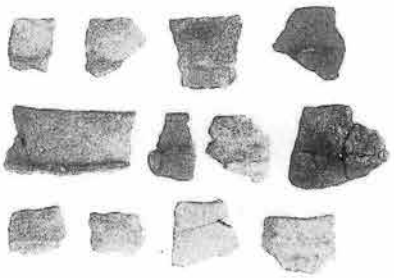


㊾出土土器（54～65）

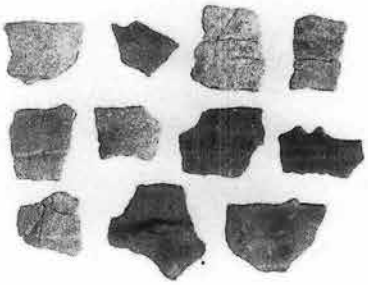


㊿出土土器（66～81）

(51)出土土器（82～90）

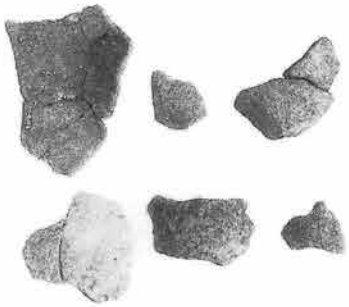


(52)出土土器（91～102）



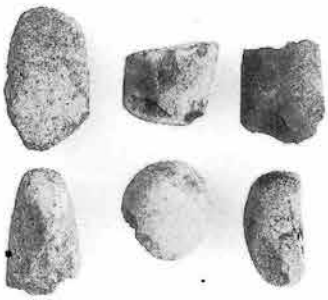
(53)出土土器（103～113）

㊹出土土器（114～123）



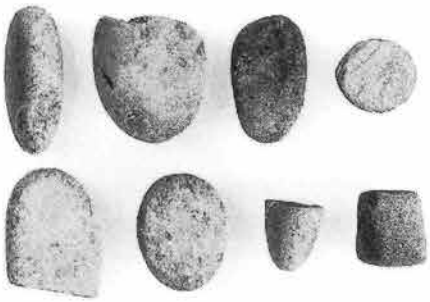
㊺出土土器（124～129）

㊻出土土器（130～136）

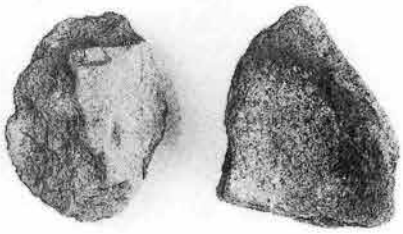


㊼出土土器（137～143）

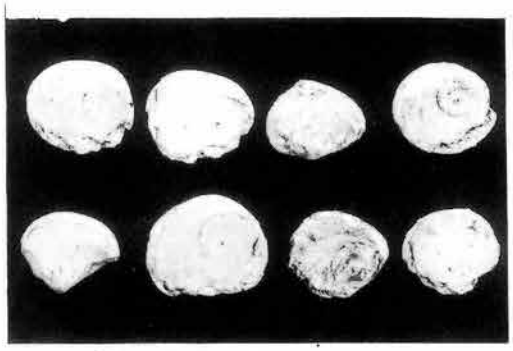
㊽有溝石製器（140）



㊾出土石器（144～149、151、152）

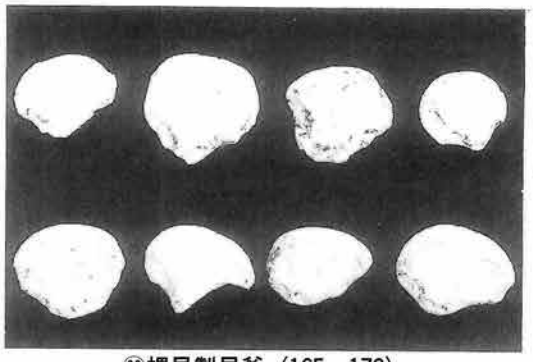


㊿出土石器（150、153）



61螺貝製貝斧（157～164）

図版10

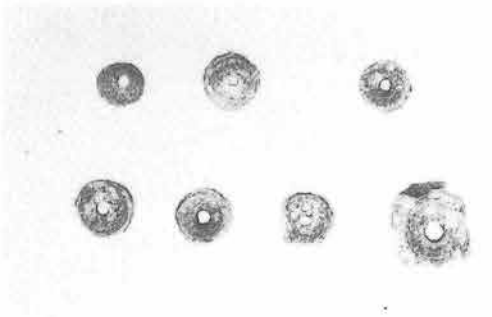


⑥②螺貝製貝斧（165～172）

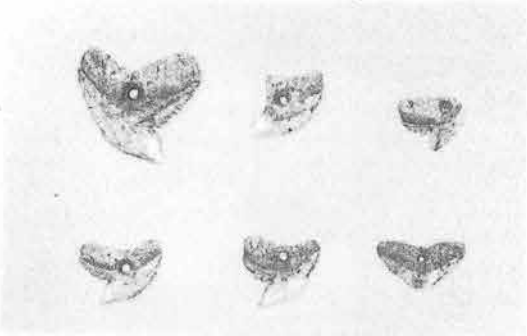
⑥③螺貝製貝斧（173～176）

⑥④骨格器～装飾品（177～183）

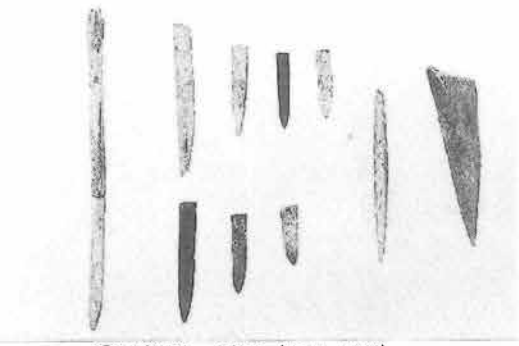
⑥⑤貝皿（156）



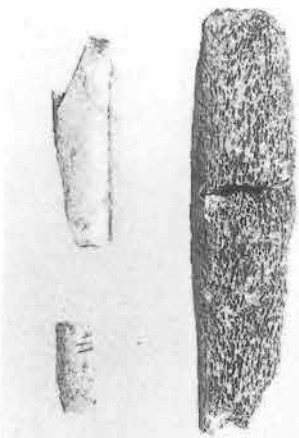
⑥⑦貝玉（154，155）耳栓（190～194）



⑥⑥骨格器～垂飾品（184～189）



⑥⑧骨格器～利器（195～204）



⑥⑨骨格器～利器（205～207）

あとがき

与論町の人々に「ワーティ　タバーリ」と迎えられ，我々を旅人とし，毎晩のように黒糖酒での「与論献奉」による歓迎を受けた。発掘調査の行われた時期は5月とはいえ，日中はもうすでに夏を思わせるものであった。最終の休日には，古代の人々も魚や貝類を採集したであろう珊瑚礁のリーフで作業員の方々と潮干狩を楽しませていただいた。

発掘調査は参加した人々も「わが町の古代歴史」への期待を胸にしながら，また我々の無理を聞きながら調査にあたって頂いた。その甲斐あったか，住居跡の発見となってその成果を見ることができた。

調査成果はまことにすばらしいものであったが，整理期間等や担当者の未熟さ故出土遺物や遺構等について十分な分析・検討まで力が及ばず，その全てを語らしめることができず，不十分な内容となってしまったが，出土資料は今後の南島地域の研究にとって貴重なものとなるものである。

調査に際しては，教育委員会のみでなく，町役場の関係各課も協力を惜しまず，まさに町全体を挙げての発掘調査となった。

また調査後は，上城跡の一部を買収して保存を図り，住居跡群の確認された地域についても設計変更等により保存に努めていただいた。

最後に，関係諸機関の方々並びに発掘調査に従事していただいた地元の方々や面倒な整理作業に従事していただいた文化課収蔵庫の方々に心より「トートガナシ」を申しあげます。

発掘調査に従事していただいた方々

阿野　三雄，南　　吉信，佐藤　為清，南　　正生，基　　長光，菊　　千代，滝　　ヨシ，佐藤　ハナ，南　　ハナ，沖津ヨシ子，南　トミ子，永井美江子，森　　キヨ，中田　律子，久保カズ子，西　　キヨ，里　　ハナ

整理作業に従事していただいた方々

下畠　節子，相良　政子

与論町埋蔵文化財調査報告書(1)

上城跡・上城遺跡

1990年3月

発行　与論町教育委員会
〒891-93 鹿児島県大島郡与論町茶花32
Tel　0997—97—3111
印刷　有限会社　朝日印刷
〒890　鹿児島市上荒田町854－1
Tel　0992－51－2191